

佐々木

泰樹

育英会

公益財団法人

佐々木泰樹育英会

2023

02	財団概要
03	佐々木泰樹育英会の成り立ち 理事長 佐々木泰樹 写真——遠藤文香
	専 攻 紹 介
08	建築
09	デザイン・工芸美術
10	医学
11	口語詩句
	口 語 詩 句 賞
12	2019年度 —— 新人賞 山田洲作
13	2020年度 —— 新人賞 春町美月
14	2021年度 —— 新人賞 まちりこ
15	2022年度 —— 新人賞 郡司和斗
	出 身 者 の 現 在
18	建築—— インタビュー 高藤万葉・小滝健司
20	建築—— 近作紹介 齋藤直紀
21	建築—— 近作紹介 殿前莉世・福留 愛
22	建築—— 座談会 寺田慎平・岩本早代・山田陽平・下田悠太
28	デザイン・工芸美術—— 近作紹介 大谷陽一郎
30	デザイン・工芸美術—— 近作紹介 若田勇輔
31	デザイン・工芸美術—— 近作紹介 大小田万侑子
32	口語詩句—— エッセイ 高良真実
34	口語詩句—— インタビュー 暮田真名
	歴代奨学生一覧
38	奥付
40	

公益財団法人 佐々木泰樹育英会

佐々木泰樹育英会は、学術もしくは芸術について優れた考え方と熱意をもつ学生に対する奨学金の給付および表彰・助成を行い、もって社会の発展に寄与することを目的とした財団です。所属する学校での学業成績や生計維持者の収入額は不問とし、4つの専攻ごとに作文・作品・ポートフォリオあるいは面接等による選考を経て、毎年度の奨学生を採用しています。

設立日

2016年4月1日

設立者

佐々木泰樹

所在地

東京都中央区明石町8番1号 聖路加タワー40階

事業内容

[奨学金事業]

- 建築 (大学生・大学院生)
- デザイン・工芸美術 (大学生・大学院生)
- 医学 (大学生)
- 口語詩句 (中学生・高校生・大学生・大学院生)

[表彰事業]

- 口語詩句賞 (一般)

支援実績

延べ220名 (2022年12月10日現在)

- 2016年度 ――― 9名
- 2017年度 ――― 15名
- 2018年度 ――― 25名
- 2019年度 ――― 42名
- 2020年度 ――― 42名
- 2021年度 ――― 42名
- 2022年度 ――― 45名

役員

[理事長]

- 佐々木泰樹 | トゥループロパティマネジメント株式会社 代表取締役

[理事]

- 陣内秀信 | 法政大学 特任教授、中央区立郷土天文館 館長
- 寺島秀昭 | 晴海協和法律事務所 パートナー弁護士
- 堂免拓也 | 株式会社三友システムアプレイザル 代表取締役社長
- 富永 譲 | 有限会社富永譲・フォルムシステム設計研究所、法政大学 名誉教授
- 長島明夫 | 出版長島
- 安田博延 | 平河町法律事務所 弁護士

[監事]

- 中野竹司 | 奥・片山・佐藤法律事務所 パートナー
- 大和寿子 | 大和公認会計士事務所 公認会計士・税理士

[評議員]

- 飯野 仁 | 株式会社ブイ・テクノロジー 執行役員
- 伊東 毅 | 銀座南法律事務所 弁護士
- 桑原清幸 | 桑原清幸会計事務所 公認会計士・税理士
- 富永 紳 | レガリスの森法律事務所 弁護士
- 山本唯倫 | 新紀尾井町法律事務所 弁護士



2022年度 奨学金給付通知書授与式にて

_____ 本会も2016年の設立から早6年が経ちました。これまで理事長ご自身の言葉で本会の趣旨や設立の経緯が公に向けて語られることはなかったので、今日はそのような機会にできればと思います。まず佐々木さんが財団法人を立ち上げて奨学金事業を始めた経緯を聞かせてください。

佐々木 私は美辞麗句というものにアレルギーがありましてね。じんましんが出てくるくらい嫌なんです(笑)。それと聞こえのいいストーリー仕立ても駄目ですね。ですからそういうことを抜きにして率直に申し上げますとね、私の人生でお金が余りそうだという単純な話なんです。要するに今の大学生が昔と比べて厳しい状況にあるといった、社会的な問題意識が先にあって始めたことではない。

このままいくと、私が死ぬときにけっこうな額のお金が余りそうだった。しかしあまり大きなお金を遺すと、子供たちの人生が狂ってしまう。日本の場合は相続の遺留分というものがあって、どんな内容の遺言を書いたとしても、遺族はその分だけはもらう権利があるわけです。私は相続税法はまったく嫌いで、これが日本人を下品にしていると思う。たとえば遺産が1億円もあると、ほとんどの兄弟姉妹が争うのではないのでしょうか。仲の良かった兄弟が、それ以降一生連絡を取り合わなくなるような例がたくさんある。それが醜くて醜くてしょうがない。兄弟がいなかったとしても、大きなお金をもらって平常でいられる人は少ないですね。ですから私が原因で子孫を下品にしたくない。それが理由です。

_____ まさに「児孫のために美田を買わず」(西郷隆盛)ですね。それは単に相続の問題だけでなく、佐々木さんの人生観に近いものに思えます。そうした考えは以前からお持ちだったのでしょうか。

佐々木 ええ。私が30歳を過ぎた頃ですか、田中角栄が総理大臣で、日本全体が開発の対象になっていた。田舎のほうの開発可能な山林や農地まで地価が高騰したんです。そのとき、岩手の実家にどのくらいの資産があると思うかと、父親に聞かれた。あの当時で3億か4億くらいあったでしょうか。でも私は、欲しければ自分で稼ぐからいらない、欲しい人にあげてくれと言った。誰かからお金をもらってよいのは学生のうちだけだと思っています。学問をしているなら仕方ない。でも働いているからには、自分で稼いだ範囲で生活をするということです。

私は23歳で籍を入れましたが、その翌月から、双方の両親に1人あたり1万円、毎月合計4万円を送金しました。当時、横浜で小学校の教員をやっていた妻の手取りが2万円いかないくらい。どんなにお金がないときでも4万円は送る。残ったお金で生活する。ですからいちば

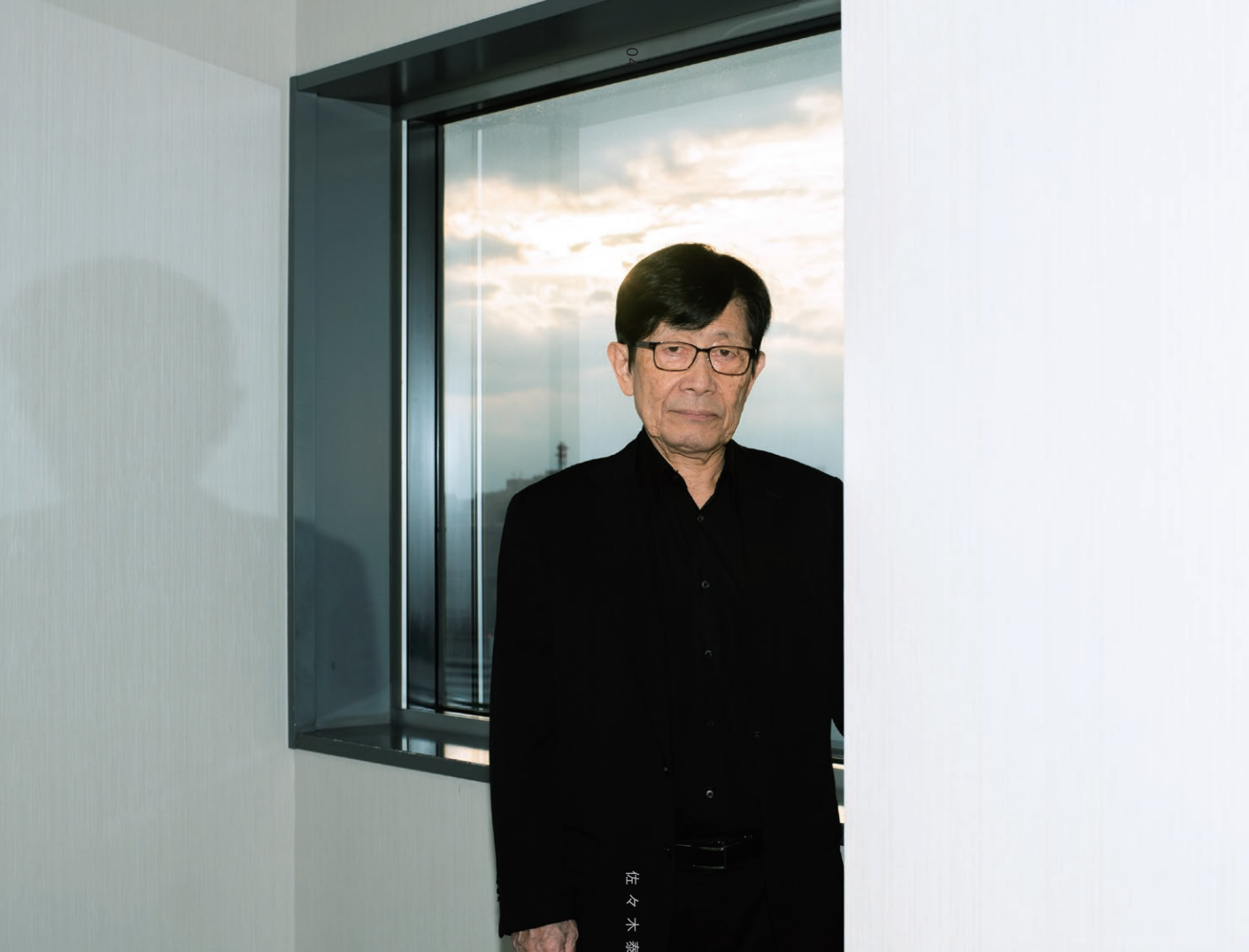
佐々木泰樹 | ささき-たいじゅ

プロフィール

1946年	岩手県宮古市に生まれる
1964年	岩手県立宮古高等学校を卒業、都留文科大学に入学
1969年	同大学を中退し、東都商事株式会社に入社、貸事務所仲介営業に従事
1972年	ビルディング不動産株式会社を設立して独立
1992年	サプリース株式会社を設立(現・代表取締役)
2000年	エスピーシー証券株式会社を設立
2004年	トゥループロパティマネジメント株式会社を設立(現・代表取締役)
2016年	一般財団法人佐々木泰樹育英会を設立、理事長に就任(2021年より公益財団法人)

著書

2010年	『空室を抱える中小オフィスビルオーナーのための 満室ビル経営』幻冬舎
2015年	『アフォーリズム 仕事』トゥループロパティマネジメント
2021年	『五月の樹』トゥループロパティマネジメント
2021年	『アフォーリズム 仕事II』トゥループロパティマネジメント



佐々木 義典 氏

んお金がない頃は、さすがに1ヶ月の小遣いが1万円もなかったですね。会社をつくってから貧乏なときはありましたから、飲みに行くときは立ち飲みかガード下。その頃からの考えが今も基本になっています。

_____ 財産を子孫に遺さないとしても、自分で使い切るという考えはありませんでしたか。

佐々木 そういう気持ちがあればぜんぶ使ってみせます。でもやりたいことが、使い道がないんです。何億円もする高級車も興味がない。豪華客船をチャーターして、何年かけて世界中を回れば、それはなくなるかもしれませんが、そういう趣味もない。だからどうしようもない。

それですで考えたのが公益法人への寄付でした。国に寄付するのは不愉快ですしね(笑)。こちらから見て、良いことをしていると思える団体に使ってもらうのがいちばんいい。たとえばウォーレン・バフェットという有名な投

資家は、何百億ドルかある自分の財産の大部分をビル・ゲイツの財団に寄付した。それはその財団が良いことをしていると考えて、そういうところに使ってもらいたいと思ったからでしょう。

公益法人への寄付を思い付いてから、会社でお世話になっている会計士の立野晴朗さん(元理事)に相談したんです。私としては赤十字でもどこでもかまわない、良さそうなことをしているところがあれば、そこにぜんぶ寄付しようと思っている、そう言った。でも立野さんは、それならご自分で財団法人をつくったらいかがですかという意見でした。それでそういう考え方もあるかと思った。それが発端です。

／ 4つの専攻の背景 ／

_____ 財団法人のアイデアが生まれて、それがまずは建築と法律の分野の奨学金事業に結実していくわけですね。そこにはどうい

う意図があったのでしょうか。佐々木さんは若い頃からずっと不動産の仕事に携わられてきて、そこで財を成した。その間、建築にも法律にも深く関わられてきたでしょうから、もう一度それぞれの業界に還元することで恩返しという……

佐々木 いやいや、そういうクサイ話はやめましょう(笑)。そういう美談めいた話ではなくて、私の場合はごく具体的なんです。財団法人の設立を思い立ったとき、学生の頃からよく知っている本橋良介さん(建築家、現・選考委員)に、そのことを話した。そうしたら彼が、ぜひ建築学生のための奨学金をつくってほしいと言った。彼は東京工業大学で博士課程まで行って、奨学金で700万円借りているんです。その返済が当時はまだ半分以上残っていた。建築の学生は忙しくてアルバイトをする時間もないですし、旅行して建築を見て回るのもお金がかかりますからね。それでまず建築学生のための返済不要の奨学金を決めた。

法律のほうは会社の顧問弁護士である寺島秀昭さん(現・理事)がきっかけです。寺島さんは大学の先生もされていて、若者をできるだけ応援したい。当時、司法修習生が無給料になっていたんです(2011年に給費制が廃止され、貸付制に移行)。それまでは月額20万円くらいはもらえたのに、司法行政の官僚が削ったわけです。それも不愉快な話ですね。それで寺島さんに、司法修習生が大変だからなんとか手助けできませんかと言われて、お金を出すことに決めた。

ただ結局、司法修習生はその後すぐに、やはり無給は問題があるということで、給費制が復活したんです。それと修習生は学生ではないですから、財団の奨学金事業の枠からは外れるものだった。つまり、公益認定の審査で問題になるわけです。それで司法修習生への援助は2年間で止めることになりました。

司法修習生だけでなく、当時は若手建築家や若手弁護士、研修医といったカテゴリーで、学生以外への援助も試みていた時期でした。本会はもともと一般財団法人として設立されましたが、2021年に公益財団法人に移行しています。それはやはり公益財団法人のほうで税制の面で資金を有効に活用できるということでしょうか。

佐々木 と言うよりは社会的な信頼性です。公益のほうが一ルールが厳しいですから、活動していくに当たって信頼を得やすい。選考委員や理事をお願いする方、お金を受けとる奨学生にしても、公益法人のほうがなんとなく安心でしょう。

2018年からデザイン・工芸美術と医学、2019年から口語詩句と、分野を増やすことになったのも、その公益認定が背景にあります。要するに建築だけでは毎年30名以上の奨学生を採用できなかった。どういうことかと

言うと、公益の基準は公平であること。そのためには大勢のなかから1人か2人選んでいては駄目なんです。4、5人でも駄目。内閣府が設定した公益性の基準が30人だった。ところが建築だけだと、いくら応募者が増えても、採用したいと思える人の数は限度があるんですね。

以前、目黒区美術館で村野藤吾さんの展覧会を見たんです。びっくりしましてね。数寄屋の住宅からデパートから役所から、なんでもやっている。ああ、建築家って社会に何人もいらないんだなと思いました(笑)。こういう才能のある人が何人かいればそれで十分だと。もちろんそれだと世の中の建築すべてを設計することはできないので、あくまで理想的にはですけどね。

現行の4つの専攻について言うと、建築があるならデザイン・工芸美術もあって不思議はないですが、口語詩句と医学はやや毛色が異なりますね。

佐々木 口語詩句は設置するのがべらぼうに大変だというのは分かっていました。他の専攻は書類選考と面接だけですが、口語詩句はそれだけでは足りず、インターネット上のプラットフォーム(口語詩句投稿サイト72h)を整備したいと考えていましたから。それでも前々から興味を持っていたことではあるんです。

と言うのは、私自身が若い頃からへたな詩を書いていました。高校の頃は町の文芸同人誌に参加して、毎月発表していました。大学に入ると空手部で一級上の先輩が俳句をやっていて、誘われて1年くらい、句会にも通いました。その頃、のちに有名になる坪内稔典や澤好摩という人たちが全国学生俳句連盟というものをつくったんです。その第1回の大会が、ちょうど私が通っていた大学で開かれた。そういうものにも参加していました。

ただ日本では、俳句は俳句、短歌は短歌、川柳は川柳で、それぞれがそれぞれのジャンルの枠の中で活動しているんですね。それらの枠の外にもう一つ、現代詩というジャンルもありますが、そのぜんぶをまとめて並べるテーブルはなかった。口語詩句ではそれをやってみたかったということです。

医学のほうはどうでしょうか。

佐々木 医学にも思い入れがあります。もともと私は非常に病弱でした。2歳のとき、親が病院に連れて行ったら、ここはお寺じゃないと言われたらしい。で、4歳か5歳の頃に小児結核になった。うちの父親の系統は結核が多かったんです。ずっと寝込んでいて、のちに県立宮古病院の院長になる河合先生というお医者さんが、看護婦さんを連れて、ほとんど毎日往診に来てくださった。5歳の後半からはすこずつ良くなったのだけど、その頃も毎日病院で静

脈注射をしていました。ですから幼稚園は1ヶ月ほどしか行っていないし、小学校も1年生の頃は30日くらいは休みましたかね。それだから私は病院とはずっと長い付き合いがあるんです。

それともう一つ、これは大人になってからですが、私が病院に行くと、いつもお医者さんと喧嘩になる。お医者さんは診断しますよね。そうすると私は私で専門書を読んだりして徹底的に調べて、これはどういう病気だと、自分で診断をする。そうするとお医者さんの見解と私の見解がだいたい7割近く違う。でも私のほうが当たっているんです。こんな話をすると、私の従兄弟の昭和大学病院の副院長(小林洋一氏、現・選考委員)が嫌な顔をしますけどね(笑)。しかしだからこそ良いお医者さんに育ってほしいという気持ちがある。

3年前には自分でも銀座にクリニックを開きました。ところがこちらで雇うお医者さんはお金が第一という人が多くて、なかなか良い人がいない。儲けたくてやったことでもないで、結局この3月に閉じてしまいました。もう一度チャレンジしたい思いもありますが、もうあまり時間もありませんね。

／ 学生への思いと 財団のこれから ／

_____ もともと慈善的な意識があって始めたことではないというお話でしたが、本会が対象とする多様な分野も、それぞれ佐々木さん個人の経験や人との縁に根ざしていることが見えてきました。ところで2023年度からは、建築、デザイン・工芸美術、医学の3専攻で、これまで最高で年額100万円だった給付額が倍の200万円に上げられますね。学生に対しては、せっかくこれだけの援助をするからにはこうなってほしいという期待はあるでしょうか。

佐々木 もちろん期待はありますよ。せっかく生まれてきたのだから、自分の才能に気が付いてほしいということです。自分に気が付く人と気が付かない人がいる。それも才能なのでしょうけどね。

たとえば長島さんがどんな人間なのか、私が認識しようとする。でもそのときの長島さんは、私のなかのプリズムを透して映った長島さんなわけです。そうすると私が本当の長島さんを知りたいと思えば、自分自身のプリズムのメカニズムをきちんと認識しなければならない。そうでないと対象に近づけない。映画でも小説でも本当に近づきたいのであれば、自分自身のプリズムを認識しなければならない。私がたった一つ、若者に望むのはそれだけ。自分自身と向き合ってほしい。

これは私の基本的な考えですが、多くの人は、自分の人生は自分で得た知識を用いて自分で判断をし

8

て生きていると思っています。でも本当はそうではない。判断の仕方から好き嫌いから感情の表れ方から、あらかじめプログラムされたなかで生きている。あらゆる素数を表す算式が存在すると言われるように、世界はもともと全体として秩序づけられている。個では成り立たない。これをみんな認めたくなくて、自分の頭脳で判断していると思っている。しかしそのことに気が付かないと自分自身の才能にも気が付かない。そう私は思っています。

_____ 人にはあらかじめ、それぞれ動かしがたい個性が備わっているということでしょうか。

佐々木 はい。ですから私は、学生の才能は見守るだけでよくて、あまり具体的にこうなってほしいと考えるのも僭越だと思います。親が子にこうなってほしいと期待する気持ちも理解はできますが、それも私は僭越だと思う。会社の場合には経済活動ですから、社長は社員にこうなってほしいと言わないと仕方がないですが、人間の人生については、他人にこうなってほしいというのは、基本的にはおこがましいと私は思う。ですから私ができるのは、才能がありそうな人の経済的な負担をすこし軽減する。そしてその人の時間を、自分がしたいことに向けてもらう。そういうことです。

_____ 本会の今後の展望としてはいかがでしょう。

佐々木 個々の学生に我々がなにか求めることはなくても、学生同士の交流は生まれてほしいですね。新型コロナが発生してからは控えていますが、奨学生だけの交流会も、きちんと参加基準を整備して再開したいと思っています。やはり最初のきっかけがあって、止揚しあえる人が見付かれれば、あとは勝手に仲良くなって、その関係は大学を出てからも続いていきますから。

もう一つ大きなところで気にかけているのは財団の方向性です。様々な意見を言う人たちがいるなかで、どういった方向性を保っていくのか。若者に対する温かい目も必要ですが、公正な目で判断できる人がいなければなりません。今は私がいなくなった後のことも見据えて考えているところです。

そのためには会社のほうも、あとすこし頑張らないといけません。10年くらい前までは、最後は株式を売って、そのお金をどこかに寄付して終わりにするつもりでしたが、今は残す方向でいこうと思っています。あと9年で85歳になりますが、それまでにまたすこし良い会社にしたい。そこは財団を始めて考え方が変わったところですよ。

—

2022年8月17日収録



佐々木泰樹 写真家

えんどうあやか—2019年度後期-2020年度後期奨学生
1994年生まれ。2018年、東京藝術大学卒業。2021年、
同大学院美術研究科デザイン専攻(視覚伝達研究室)修
士課程修了。現在は東京を拠点としてフォトグラファー
として活動。2021年度キャノン写真新世紀で佳作入
選(オノデラユキ選)。

建築

2017年度開始

給付額	
大学生	年額50万円
大学院生	年額200万円

日本国内の大学・大学院で建築を専攻する学生を前提とした奨学金で、特に将来、一級建築士として独立して設計事務所(意匠・構造・設備)の開業を志す人を対象としています。

例年10月に本会ホームページにて応募要領を公開し、翌年2月から3月にかけて、募集および選考(書類・面接)を行います。これまで毎年度10〜15名程度に奨学金を給付してきました。

選考委員 2023年度	
● 大野博史	
構造家、オーノJAPAN 代表	
● 富永 譲	
建築家、富永譲・フォルムシステム設計研究所 代表、法政大学 名誉教授	
● 長島明夫	
編集者、出版長島 代表	
● 本橋良介	
建築家、MMAAA 共同代表	
ほか	

それぞれの学生が、生まれながらの興味、自らの本性を、学生時代に自覚するということは極めて大切と思う。人は同じように見えるがそれぞれ植物のように「咲かせる花」を皆持っている。好きなもの、得意なこと、大事で掛け替えないと考えているものは皆異なっているから、幸福や生きる歓びを日常にもたらす建築家にむけての教育内容は、何か一定の学業のカリキュラムをこなして習得するというだけには収まらない、極めて広範な人間的素養を育てゆくことだ。

自ら面白いと思うもの、熱中できることを発見し、探求することに、時間を費やして、「大いなる道草」をし、遊びながらゆっくりと学んでいってほしいものだと思っている。本を読むのもよし、映画を見るのもよし、旅に出るのもよし、要するに外側の世界に興味を開き、内側にたいへん豊かなものを育て、そんな自らの経験を一杯に充電してゆく大切な時だ。

ル・コルビュジエは、自らの若い時を振りかえってこんなことを言っている。

「人は20才と30才との間において大台風の岬を廻らねばならない。人生行路を定める、生命の底深い意志の働くのはこの時機である。このとき人間は無我夢中で人生の選択をしてしまう。あなたの心の奥深くあなたをある方向に導く舵がしっかりとつくられてゆく。そして30才となる時、人は嵐の岬を廻った者も、廻らぬ者もどこか、一応は平穏な港に着くだろう。」

『今日の装飾芸術』前川國男訳、鹿島研究所出版会、1966年、p.239

佐々木泰樹育英会は、社会のなかでインディペンデントな建築家として離陸してゆこうとする勇氣と才能と志を持った学生を支援してゆこうとする趣旨の基に設立された。

これまで支援を受けた学生のなかに、そこで友達をつくり、相互に刺激し合い、旅に出て交流し、才能を伸ばし、それぞれの台風の岬を廻り、羅針盤を定め、活躍する人が多く出てきていることは喜ばしいことである。

自らの「咲かせる花」を自覚し、そこにに向けて無我夢中で努力する若木に、外側からそっと水遣りするのが、この育英会の役目であると理事長も私たちも考えている。

デザイン・ 工芸美術

2018年度開始

佐々木泰樹育英会

給付額

大学生	年額50万円
大学院生	年額200万円

日本国内の大学・大学院でデザイン(グラフィック、プロダクト等)または工芸美術(彫刻、陶芸、漆工、テキスタイル等)を専攻する学生を前提とした奨学金で、特に将来、専攻分野で独立してデザイナーまたはアーティストとなることを志す人を対象としています。

例年10月に本会ホームページにて応募要領を公開し、翌年2月から3月にかけて、募集および選考(書類・面接)を行います。これまで毎年度5名程度に奨学金を給付してきました。

選考委員 | 2023年度

- 浅葉克己
アートディレクター、浅葉克己デザイン室 代表
- 榎本了壺
アートディレクター、アタマトテ・インターナショナル 代表
- 佐々木泰樹
トゥループロパティマネジメント 代表

「デザイン・工芸美術」分野で修学されている人は、若い時からかなり具体的な未来の自分の姿、仕事を想定して、美術系の大学を専攻しています。そういう点では大学に入ってから、自分探し、自分作りをするのではなく、希望する仕事と生き方に添えるような力を、どのようにつけたらいいのかを、目標に生きている人たちだと思います。多分それに近いような考えを持って、修学しているのでしょう。現在ではそういう学修行為を「スキルをつける」などといったりますが、ざっくり言うと、「スキル」は基本能力であって、それだけではクリエイティブな仕事は完成しません。このクリエイティブの世界が面白いことは、誰でも出来るようなことが出来ても、何の評価にもならないということです。誰もがしていないようなことをして初めて価値が、評価が生まれるのです。何と面倒なことでしょう。しかも大学では、授業課題と制作実習に追われています。先生の出されたさして興味のわかない制作に、日々追いかけてられているといったのが実情かもしれません。しかし、そんな意味のない苦行のようなことも、実は人間としての耐久力や、忍耐力、持久力、あるいは戦略力のようなものをつける修行のようなものになるのですから、馬鹿には出来ません。専門能力をつけるためには、人間としての基礎能力が結構問題になってくるものです。私はそれを「スペシャリストとジェネラリスト」と呼んでいます、「専門家と統括家」その両面をもってこそ、来るべきクリエイターに成長して行くものと確信しています。そして何よりも「チャレンジする意志」だと思います。佐々木泰樹育英会の面談で、さまざまな学生たちのプレゼンテーションに接して、目の前にある作品の成果だけではなく、その人の心の中のパッションをどう読みとるかが、私たちに課せられた大きな役割りと決心しております。

医学

2018年度開始

佐々木泰樹育英会の医学専攻の審査員を務めて3年になります。毎回優秀な学生諸君に応募していただき、いずれも甲乙つけ難く選考審査には苦勞しています。応募する学生諸君がバラエティーに富んでいるのも本育英会の特徴で、将来性を見据えた学生選考が可能となっていてうれしく思います。選考に当たっては、医学部受験にあたり知育を十分に受けてきた諸君ですので、学力を評価する必要はないと考えております。選考では、学生時代に医師としての基本的な知識・診療技量を得る能力、患者や多職種と誠実に接し、コミュニケーションを良好に取り得る能力、医療の安全や倫理を考えることのできる能力を有していることは最低条件です。医療は、人間相手なのでバリエーションが著しく、画一的な対応は困難です。それゆえ、柔軟な対応力を持ち、医療の問題を粘り強く解決する能力を有していることも必要です。

それに加えて、例えば、医学分野にとらわれずに、他の分野にまたがる発想や研究などを自ら行える能力を有しているかなどを評価させていただいております。給付型奨学金ですので、制約を受けることなく、分野を超えた自由な発想も生まれやすいと考えます。また、目的達成のための留学費用の一部に充てるなど幅広い目的で使用する事が可能です。われわれ財団としては、固定観念にとらわれることなくユニークで前向きな発想で日本の目指すべき医療を考え、将来大きな果実が実ることを期待しております。応募するみなさんには、現在の医療の問題点を鋭く指摘して、画期的な解決方法まで考察できるような柔軟な脳の持ち主であることをアピールしていただきたいと思います。

佐々木泰樹育英会

給付額

医学部1-4学年 **年額50万円**

医学部5-6学年 **年額200万円**

日本国内の大学で医学の正規課程に在籍する学生を前提とした奨学金で、特に将来、医療機関にて医師になることを志す人を対象としています。

例年10月に本会ホームページにて応募要領を公開し、翌年2月から3月にかけて、募集および選考(書類・面接)を行います。これまで毎年度1-3名程度に奨学金を給付してきました。

選考委員 | 2023年度

• 小林洋一

医学博士、昭和大学医学部 特任教授、
昭和大学病院 副院長

ほか

口語詩句

2019年度開始

給付額

中学生

年額5万円

高校生

年額10万円

大学生・大学院生

年額50万円

日本国内の中学校・高等学校・大学(大学院を含む)の正規課程に在籍する生徒・学生を対象とし、口語による創作提唱の一環として設立された奨学金です。応募条件として、本会が運営する「口語詩句投稿サイト72h」にて継続して作品(6-35文字の口語作品)を投稿し、10作品以上が佳作選考されていることが必要になります。

例年5月に本会ホームページにて応募要領を公開し、翌年3月の募集期間中に応募された10作品(先に佳作選考されている作品から応募者が自選)をもって選考します。面接は実施しません。毎年度の採用人数の目安は、中学生10名、高校生10名、大学生(大学院生を含む)10名です。

後援

- 現代俳句協会
- 思潮社 現代詩手帖編集部

口語詩句投稿サイト72h

<https://www.kougoshiku-toukou.com/>

利用登録をすることで、どなたでもご自身の作品の投稿が可能です。複数の選者が毎月佳作を選考しており、投稿者にはその選評をまとめた冊子を月ごとに送付しています。作品の閲覧のみの場合は登録の必要はありません。



選考委員 | 2023年度

- 小島なお | 歌人、コスモス短歌会 所属

- 杉本真維子 | 詩人

- 高橋修宏

俳人、日本現代詩歌文学館振興会 評議員、
富山県詩人協会 会長

- 立花 開 | 歌人、短歌結社まひる野 所属

- 西躰かずよし | 俳人、罍TATEGAMI 同人

- 林 桂 | 俳人、罍TATEGAMI 代表同人

- 龍 秀美 | 詩人

ほか

西郷信綱は「詩の発生」は、神に捧げる言葉だったという。古代の詩的な修辞に満ちた言葉は、神に捧げるために用意した非日常的な特別な言葉だったというのである。言わば「ハレ」の言葉であり、人が最初に神に捧げたものは言葉だった。

ある政治家の不明瞭な言葉を「ポエム」と揶揄する批評を見たが、詩が単なる難解で頼昧的な言葉として一般的に認識されているのならば、残念に思う。

詩は現在にあっても、非日常的な言葉には違いない。日常の役に立つ言葉ではないだろう。ただ、この「ハレ」の言葉は、個人の内面を照らし出す鏡の役割を担う言葉のはずだ。自身を見つめるための言葉である。深耕の言葉である。この言葉を持つことの豊かさを知る人が、詩を書き続けているとも言えるだろう。

もちろん、短歌や俳句、現代詩が蓄えてきた詩的修辞と無縁な地平で、私たちが詩の言葉を創造するのは難しい。技術は必要だ。ただ、最近の技術至上主義のような潮流は、少し違うと思う。なぜ、技術が必要か。技術に先立って書くべきものがあるはずだ。それは個々によって異なるはずのものだ。そこに到達するために、どう書くかは問われる。

「口語詩句」は、短歌、俳句、現代詩、川柳、アフォリズムを統合しつつ、一定の枠組みを持つ詩型として、ここに示されている。定型は不自由な詩型ではなく、言葉の呼び水のような存在だろう。また、切磋琢磨できる場を提供することにもなるだろう。

益々多様化する言語状況のなかで、言葉は浅くならざるを得ないだろう。その中で、自らに向かい合う「ハレ」の言葉を持つ学生が存在することの意味は大きい。

また、これを機会に次代の詩の言葉を引き受けて起つような人が出るのであれば、「口語詩句」の作品を読み続けてきた一人として、これに優る喜びはない。期待する。

口語詩句賞

2019年度開始

賞の区分と賞金

新人賞 (1名以内)	100万円
優秀賞 (若干名)	50万円
奨励賞 (若干名)	各10万円

口語詩句賞は2019年度に口語詩句奨学金と合わせて設立された公募の文学賞です。新人賞・優秀賞・奨励賞の三賞のうち、新人賞は創作歴10年未満(10年以上のブランクがある場合は再開後10年未満)の応募者に限定され、過去の新人賞受賞者は選考対象外となります。2022年度から設置された優秀賞は、奨励賞受賞作のなかで特に優れた作品の作者に授与されます。

応募には所定の投稿期間中、「口語詩句投稿サイト72h」で36作品以上の投稿と10作品以上の佳作選考が必要になり、11月の募集期間中に応募された10作品(佳作から自選)をもって選考が行われます。口語詩句奨学生と口語詩句賞の両方に応募することはできませんが、応募作品の重複は認められません。各年度の受賞作品および選評は「口語詩句投稿サイト72h」に掲載しています。

後援

- 現代俳句協会
- 思潮社 現代詩手帖編集部

春町美月

受賞と現在——口語詩句に投稿した作品の多くを、私は寝たきりの老犬の傍らで書いた。受賞までの1年とその後半年。この時期の詩作と犬との最後の日々を、だから私は、どうしても切り離して考えることができない。

透き通るような秋晴れの朝、犬は逝った。彼女の命の最後の一滴が落ち、永遠の中に吸い込まれてゆくのを、私は必死で見つめた。他にしていられることが、もう無かった。轟音がすべての音をかき消して、いっそ無音に感じられるような、静かで苛烈な時間が流れ、私の一部をこっそりと削り取っていった。

詩が書けなくなった。言葉の森の入口でしばらくウロウロしていた。もうじき犬の死から1年が経つ。正直なところ、今も上手く森に入ることができない。

それでも、私は自分の中の詩の存在を信じたい。先生方が教えて下さった、詩で誰かの心に触れる喜びが私を支えてくれている。

取扱説明書的な言葉がもてはやされる世界で、けれども、要約され切り捨てられる言葉の中にこそ、透明なものや祈りがあると思う。

そんな言葉を拾い上げ、私はこれからも詩を書き続ける。

[はるまち・みつき/1976年生]

奨励賞	選者
青木 雅	秋 亜綺羅
うすしか	杉本真維子
長谷川柊香	西躰かずよし
ペロニカ	林 桂
山口航平	龍 秀美

1	蝶の鱗粉 指先の黄色を 半ズボンの裾で拭く
2	少女が四人 閉じたチューリップのように 頭つきあわせ 誰かが秘密を打ち明ける
3	リボン 解けて落ちて信号はまだ青で なのに もう取りに行かないのね わたしは
4	水泳バッグを蹴り蹴り歩いた あの時のうなじの熱を 今なら孤独と呼ぶだろう
5	小説を読んでいるうちに 日が暮れて 薄闇の部屋は ニヘア缶の青
6	畳の上に 脚をにゅうにゅう投げ出して 台所のトウモロコシのこと 考えていた
7	ダンゴムシは 丸く身をちぢめて死ぬのだな ころころと 風に乗りやすい かたち
8	まどのすきまから とうめいのへびみたいにか ぜがするする はいつてきたよ
9	山羊の眼と珈琲豆は やけに陽気で哀しいし 空なんか 馬鹿みたいに高いだけ
10	土鍋で飯を炊く 吹き零れる瞬間を待ち 白から透明になりゆく 米とわたし

新人賞 まちりこ

受賞と現在——言葉はただの輪郭で、その限られた器の中にどんな想いを詰め込んで行くのか。日々、外側にあるこの世界に触れることで、自分の内側を見つめ直すということ。それが、私が口語詩句と出会い考えたことでした。

特に、毎月の佳作に対しての選者の方々の総評は、私という存在の心の現在地を示してくれるものでした。ある時はまさに私の心に寄り添った言葉、またある時は、私が想像もしなかった視点での総評に、毎月ため息が出ました。

新人賞受賞後は、私の内側にあるものが外側の世界にはみ出して、今もどんどん膨張しています。まるで、私の中で眠っていた不変が普遍に変わって行くように。決して特殊なものではなく、日常に溢れているもので、しかし、あまりにもありふれたもののカタチをしていて、なかなか気づけないもの。私にとってそれは、「家族」です。

今後も、私にとっての普遍的な「家族」を言葉にして行きたいと思います。

[まちりこ/1975年生]

奨励賞	選者
火鯨研	浦 歌無子
五味はこ	小島なお
翠	杉本真維子
藤色	立花 開
豊富瑞歩	西鉢かずよし
山本先生	林 桂
	龍 秀美

1	梅雨時の日差しの白さ
2	古井戸に投げた小石の音を聞く 空蟬ひろい持ち帰る夏
3	息子からオモチャの剣で 斬られてる 明日は早朝会議のある日
4	あの日 うさぎ小屋の鍵をかけ忘れたのは 私です
5	耐えきれず湖で泣く 母さんが祖母を母さんと 叫んでいる
6	遺伝子の青の部分を吐き出せば 閉じられてゆくいくつかの窓
7	ブランコを立ち漕ぎしたい 寂しさは揺らせば 消える そんな気がして
8	目の奥に静かに潜む傘があり 閉じれば涙が溢れてきます
9	まだ満足に歩けない子が ゆるやかな カーブを曲がるようなかなしみ
10	美しい訛りで 夜を見渡せば 色づいていく おかえりの声

新人賞 郡司和斗

受賞と現在——僕は地方国立大の大学院生で、普段は不登校の研究をしている。一応、卒業したら東京に戻って高校教員になろうと思っている、とまでパソコンに文字を入力して、自分の人生を開示してなんになるのだらうと思った。でもなんとなくここから書き始めたかった。

講義や研究フィールドワークの合間に時給900円のドラッグストアでレジをひたすら打つ。そのバイト中に詩歌を思いついたらメモする。作品は主に結社誌と同人誌に載せる(たまに依頼も来る)。その繰り返しで気づけばあっという間に2年が過ぎていた。

大学院の2年間で良かった経験は雪のアンチになれたことぐらいだ。関東に住んでいると「すてきなもの」の記号としての雪ばかり知ることになるが、新潟の雪はほんとうに生活を壊しにかかってくるので、いのちをかけて向き合うしかない。今年も破壊的な雪におおわれながら詩歌を考える。

この度は新人賞に選んでいただきありがとうございました。

[ぐんじ・かずと/1998年生]

優秀賞
こはくいろ
長谷川柊香
奨励賞
立花ばとん
豊富瑞歩
中矢 温
永山逢海
奎 いう子
山本先生
吉沢美香

選者
小島なお
杉本真維子
高橋修宏
立花 開
西躰かずよし
林 桂
龍 秀美

1	小説が読めないことを 庭の明るさに喻えたら その庭にしばらく夏の雨
2	水の店には水の客 買物物は 死んでからが本番だから
3	滝がくずれる音を 聴いていると この身体にも飽きる暁
4	さびしさを言うときの 語彙のとぼしさは 夕暮れに皿を洗うように 研がれている
5	霧 何もみえなければ するどい字幕のように それこそが 僕の呼吸とおもえ
7	最後に図書館が生まれて それから僕が朝顔を 覚えるまでの暗い道
8	鯨の口の中は きれいな時間割だから 五分前行動の子供たちと 千年を老けてゆく
9	水糊のような夕に石段を登る 振り向きはしない 詩的すぎる街があるから
10	会いたいと同じくらい 会えなくていいと思う 林檎しゅかつと囁る

出身者の現在

建築 | デザイン | 工芸美術 | 口語詩句

株式会社ハヤカフ

Hayakawa

佐々木泰樹育英会が設立されて6年あまり、
かつて奨学生だった若者たちは社会で活動を開始しています。
それぞれの仕事が真に実を結ぶのは
まだまだ先のことですが、
すでにいくつかの分野では、
その第一歩の成果が出始めています。
ここからはそのうち何人かの出身者の現在を紹介します。

建築計画のお知らせ			
概要			
建築物の名称	複合ビル		
所在地	〒206-0001 東京都武蔵野市吉祥寺2-1-1		
建築主	株式会社ハヤカフ		
設計・監理	TOAST 一級建築士事務所		
建築面積	157.89㎡	延床面積	1,578.90㎡
高さ	15.00m	階数	5階
構造	鉄骨造	基礎	基礎工
工期	2023年1月～2023年3月	工期	約2ヶ月

建設業の許可票	建築基準法による確認
建設業の許可票 建設業の許可票 建設業の許可票	建築基準法による確認 建築基準法による確認 建築基準法による確認

(仮称) 複合ビル新築工事
設計・監理 TOAST 一級建築士事務所
施工 株式会社ハヤカフ

TOAST(高藤万葉+小滝健司)が
設計・監理する6階建て複合ビルの建設現場。
ふたりのオフィスから徒歩1分、
川崎市登戸に2023年1月竣工予定。

写真=長島明夫

高藤万葉 小滝健司



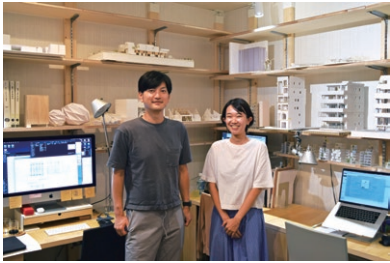
台と家 | 2020年 | 写真=中山保寛 ———— 都内で築50年ほどの団地の一室を購入し、リノベーションしたふたりの自宅。約30㎡と狭小ながら、間仕切り壁と天井を取り払い、床面も極力下げて、天井高2.9mの広々とした空間に改変。バスルームやトイレ、キッチンそれぞれ足元を浮かせたつくりで、全体のワンルームのなかにボックスが点在するような構成になっている。一部可動式のキッチンは、令和3年度キッチン空間アイデアコンテストで協会会長賞を受賞。2022年度グッドデザイン賞。

断
々
外
灘
遊
歩
道

建築家夫婦の二人三脚

聞き手=長島明夫

高藤万葉さんと小滝健司さんは2019年、結婚とほぼ同時に建築設計事務所TOASt(トースト・Takato + Odaki Architectural Studio)を設立。2021年からは川崎市の登戸で不動産開発に関わる企業とオフィスシェアし、その街のまちづくりにも携わっています。これまでの仕事について、おふたりの馴れ初めから聞きました。



たかとう・まよ ———— 2017年度奨学生

1994年生まれ。2016年、日本女子大学卒業。2018年、日本女子大学大学院(篠原聡子研究室)修士課程修了、フジワラテッペイアーキテクトツラボに勤務。2019年、TOAStを共同設立。

おだき・たけし ———— 2018年度後期「若手建築家」奨学生

1983年生まれ。東京工業大学卒業、デルフト工科大学留学を経て、2011年、東京工業大学大学院(奥山信一研究室)修士課程修了、山本理顕設計工場に勤務。2012年よりアトリエ・アンド・アイ坂本一成研究室に勤務。2018年、OAD/小滝健司建築設計を設立。2019年、TOAStを共同設立。

小滝 当時僕が勤めていたアトリエ・アンド・アイに、まだ大学院生だった彼女がアルバイトに来たのが馴れ初めです。事務所では何度か顔を合わせただけでしたが、事務所の先生の講演会があったときに彼女も誘われていて、帰る方向が一緒に喋ることがあって。それでたまたま展覧会に誘ったというのが始まりですね。

高藤 そのつもりで準備していたのでしょうね(笑)。

小滝 まあそういうことです。

————— 高藤さんは当時、日本女子大学の学生で、もう建築家になろうと決めていましたか？

高藤 はい。大学3年か4年の頃には建築の設計で独立して働きたいという意思がありました。その頃、学内でUR(独立行政法人都市再生機構)の住宅をリノベーションするコンペがあったんです。最優秀案はそのまま実施されるというもので、運よく私の案が選ばれた。そこで篠原聡子先生やスタッフの方たちと実際に作っていく過程を経験させていただいたのが大きかったです。そのときに建築を実現する喜びを感じて、自分も将来その道に進みたいと考えようになりました。

————— それでアトリエ系の事務所に就職して。

高藤 大学ではアトリエに進む人があまりなくて、情報も少なかったので、事前になるべくたくさんの事務所にアルバイトに行っただんです。もともと体力もあるほうではなかったなので、自分なりに慎重に考えていました。でも結局、学

生でアルバイトで行くのと実際にスタッフとして働くのとではぜんぜん違って、入った事務所もすごくハードだった。仕事は本当に楽しかったのですが、半年ぐらいで体調を崩してしまっただんです。それで担当していたプロジェクトも泣く泣く手放して、休職することになりました。だから満を持して独立というわけではなくて。

小滝 彼女が就職した2018年に僕は個人で事務所を開設したのですが、そのときはまだふたりでやっていくことは考えていませんでした。彼女がまだ1年目だったので、3年か4年は経験を積んでから将来的にと思っていた。結果としてそのタイミングがだいぶ早まることになりました。

高藤 私が休職していたとき、小滝さんはもう独立して、その仕事かけっこう大変になっていました。私は正直不安だらけでしたが、体調



小さな3つのホテル | 2020年 | 写真=鈴木淳平 ———— 渋谷区神泉町に立つ5階建ての事務所ビルの2-4階を、各階1室のホテルにコンバージョン。寝室が中心になりがちな従来のホテルのあり方に対して、グループでの利用も可能なようにダイニングやリビングを広くとり、住宅の延長としてデザインした。TOAStとしての初の設計作品。2020年度グッドデザイン賞。

を見ながらリハビリも兼ねて手伝ったりしていたんです。そういうことを繰り返しているうち、けじめとしてふたりでやっていこうと。元いた事務所は、私が戻ったとしてもたぶんかなり気を遣わせてしまうと思い、辞める決断をしました。結婚もそのとき一緒に決まった感じでした。

／ 地域に根ざした活動 ／

_____ 今はこの事務所がある登戸周辺のまちづくりに関わっているとのことですが。

小滝 都内で事務所を設立してから、しばらくはリノベーションの仕事が続いていたのですが、そのうちにいろんな繋がりが生まれて、その一つがここでオフィスシェアさせていたでいる井出コーポレーションでした。今、この登戸と向ヶ丘遊園のエリアが区画整理事業で一変し、多くの建物が建て替わる状況にあるんです。井出コーポレーションはもともとこのエリアの大地主で、例えば先々代の社長が向ヶ丘遊園駅や多摩区役所をここに引っ張ってきたり、昔から地域に根づいた会社でした。ですからどちらかというと一般的なデベロッパーのように経済ベースで動くのではなく、この地域のまちづくりをどうするかを念頭に考えられている。

高藤 たぶんもともと困っておられたんです。区画整理で一帯が更地になって、自分たちがずっといた街がどうなっていくかわからない状況で、何もしないわけにはいかない。そこで設計の視点が必要になるというときに、あまり親身になって問題意識を共有してくれる設計者がいなかったようで。私たちは街が変わっていくことをわりとポジティブに捉えて、模型を作ったりしながら、こんなことができるのではないかという提案をしました。それに共感してくださって、じゃあ一緒にやっていこうと、2021年の秋から会社の一角を借りているかたちです。

小滝 今はこの仕事が多くて、3ヶ月ほど前にスタッフもふたり同時に雇うことになりました。向ヶ丘遊園駅から歩いてくる途中の工事現場の一つを我々が担当していて、そこは4階までがテナントで、5-6階がオーナー住宅の複合ビルです。同じくらいの規模の建物が他に3棟建設予定になっています。

／ ソーシャルメディアの活用 ／

_____ SNSを仕事に繋げているという話も聞きました。



海辺のバビリオン | 2020年 | 写真-鈴木淳平——大分県豊後高田市の長崎鼻ビーチリゾートにおいて、パーベキューなど海辺での活動の拠点となる施設。分散配置された鉄筋コンクリートの独立壁が、適度な開放性を保ちながら、変化に富んだ居場所をつくりだす。TOASTおよび大塚優、畔柳知宏(ジミクロ)での共同設計。2021年度グッドデザイン賞、第15回建築九州賞奨励作品。

鈴木淳平



somo somo | 建築家夫婦の日常——TOASTのふたりのYouTubeチャンネル。2021年3月に開始し、2022年末の登録者数は約3.8万人。10分前後の動画が30本あまりアップされており、多いものだと視聴数は50万回を超える。字幕は翻訳サイトを利用して20カ国語ほどに多言語化し、コメント欄は外国語での投稿が目立つ。

高藤 それはまだ仕事があり忙しくない時期に始めました。私自身が病気になってしまったということもあるのですが、建築家は暮らしを提案する職業なのに、自分たちの生活に無頓着な気がして。だから生活に関わることを発信していきたいなと思っていました。それでたまたま自分たちの住まいとして古い団地の一室を購入するということもあったので、そこをDIYしていくのもコンテンツにしてYouTubeで発信していこうと。

小滝 今は建築のメディアも紙媒体からネットにだんだん移行していますよね。ただ、たぶんあまり建築家目線の内容だと、視聴者数もそれほど増えてこないのだと思います。建築家の生活や趣味まで含めて出していくことで、一般の人も共感しやすく、見ていて楽しい感じになってくる。ですから僕らは自分たちの作品もたまにさりげなく紹介するくらいで、詳しい

プロフィールも出していないんです。

高藤 今は熊本からコンタクトを取ってきてくださった方がいて、住宅のプロジェクトがひとつ動いています。それ以外にも相談をいただいたり、お話をして仲良くなったりすることもある。もともとまったく関係なかった人同士が繋がっていくのが面白いです。

_____ Instagramをしている建築家は多いですが、YouTubeはあまりいないでしょうか。

小滝 やっぱ手間がかかりますからね。僕らもたまたま仕事が空いた時期に始めて、毎週末、動画を作ってアップしていたんですけど、普通に仕事があったら無理でした。最近ではなかなか手が回らなくなっていますが、本当は

並走させて、コンスタントに発信していくのが理想ではあります。

_____ おふたりの仕事上の役割分担はありますか？

高藤 そこまで具体的な分担はないかもしれませんが。実務経験は小滝さんのほうがずっとあるので、そういう意味では教えてもらうことも多いですが、他のことはわりとフラットに。

小滝 デザインを考えるのも、基本的にはふたりで話しながらやっています。お施主さんにとっても、男性目線と女性目線の両方があって、バランスが取れているのは安心感に繋がると思いますし。いずれ担当を分けてやるスタイルをとるべき時期も来るかもしれませんが、今のところは

すべて基本はふたりという感じです。

_____ これから新築の建物ができていくのが楽しみです。ぜひよい仕事をしていってください。

齋藤直紀

さいとう・なおき ——— 2017-2019年度奨学生
1991年生まれ。2016年、東京理科大学大学院(中原幹研究室)修士課程修了後、慶應義塾大学大学院(ホルヘ・アルマザン研究室)に進学。2019年、《倉賀野駅前の別棟》でSDレビュー2019奨励賞(大村高広と共同)。2020年、慶應義塾大学大学院博士課程単位取得退学。2021年、GROUPを共同設立、論文「東京都区部における開放的な公私境界部の集合形式——暗渠上路地・鉄道高架下空間・住宅密集地域を対象として」で博士号を取得。2018年より東京デザイナー学院非常勤講師。

2021年の1月に井上岳・大村高広・齋田久美子・赤塚健とGROUPを結成し、翌月に博士論文を提出し、同月に雑誌『ノーツ』(井上岳・大村高広と共同)を刊行。その2ヶ月後には《新宿ホホワイトハウスの庭》が竣工し、そこから現在まで、個人で研究をしたり、GROUPで制作活動をしたりしている。

設計をしていると研究をしたくなり、家に閉じこもって研究をしていると、過酷な肉体労働ともいえる施工をしたくなってくる。そんなふうにして2021年はなかなかハードな日々を送っていたが、最強にハードだった個展「手入れ/Repair」を無事に終えたあたりから、個人の研究の仕事が少しずつ忙しくなり、自然とGROUPでの設計の仕事はゆるく分担制で行うようになっていった。

例えば2022年の6月は、月の初めから熱海のレジデンスプログラム「PROJECT ATAMI」に作家として参加し、展覧会の会場でもあるニューアカオに住み込みながら、昼間はホテルについてリサーチを行い、夜は部屋で個人の仕事(その時は東京藝術大学青木淳研究室のアーカイブブックに寄稿するリサーチや、海外ジャーナルへの投稿論文の執筆)に取り掛かっていた。そして7月の頭にはオープンレジデンスの展示作品を自主施工した(ある部屋の家具や畳を、そっくりそのまま別の部屋に同じように配置し直した)。そんなふうにして、現在も設計・施工・研究を同時並行的に日々繰り返しながらそれらの共同のあり方を模索している。

出 身 者 の 現 在

2023

新宿ホホワイトハウスの庭 | 設計=GROUP、2021年 | 写真=高野ユリカ ——— 磯崎新の設計により、1957年に住居兼アトリエとして建てられた「新宿ホホワイトハウス」を、ギャラリー兼カフェ・バー兼住居として改修。老朽化した既存の構造体に頼らず、外壁に取り付くかたちで自立する屋根や床などを増築。2021年11月には内部の床を修復する過程を公開したGROUP個展「手入れ/Repair」を開催。



三岸アトリエの窓 | 設計=GROUP、2021年 | 写真=高野ユリカ ——— 山脇巖の設計により、1934年に画家・三岸好太郎と三岸節子のアトリエとして建てられた「三岸アトリエ」。竣工当時に雑木林が広がっていた周囲は住宅街になり、堀が玄関に設けられた窓の間近に迫っていた。そこで、窓は、風通しを良くするため回転して開き、同時に外部花壇の植栽を映し込むように設計した。



「感性の遊び場」ANB Tokyo | 会場設計=GROUP、2022年 | 写真=大村高広 ——— 複製可能な素材・技術を用いて表現する作家や、既製品やデジタルイメージから「もの」の見え方を追求する9名によるグループ展の会場構成。既存の空間を狭める間仕切りではなく、パンチカーペットの床とLGS(軽量鉄骨)の什器によって100をこえる作品の整頓を試みた。



殿前莉世 福留 愛

とのまえ・りせ ——— 2018-2019年度奨学生

1995年生まれ。2018年、日本女子大学(宮晶子研究室)卒業、東京藝術大学大学院(中山英之研究室)に進学。同年よりiii architectsとして活動開始。2019年、リヒテンシュタイン国立大学に留学。2021年、東京藝術大学大学院修士課程修了。2022年よりiii architectsと並行してAS(Aoki & Shinagawa + associates)に勤務。

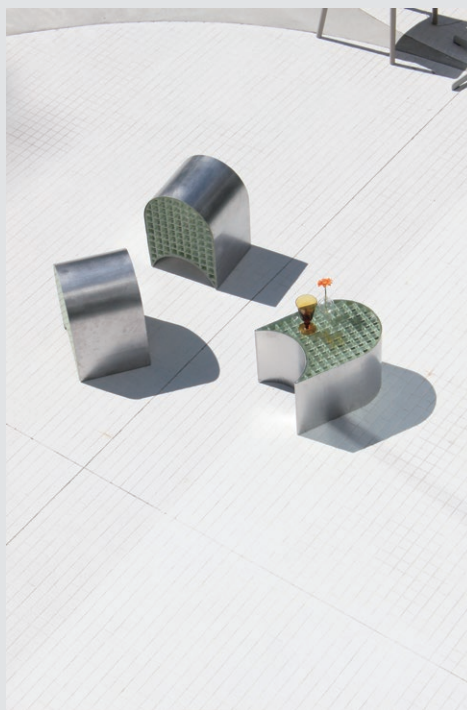
ふくどめ・あい ——— 2018-2019年度奨学生

1995年生まれ。2016年、国立熊本高等専門学校卒業。2018年、熊本大学(田中智之研究室)卒業、横浜国立大学大学院Y-GSAに進学。同年よりiii architectsとして活動開始。2020年、第47回日新工業建築設計競技で1等入選。2021年、横浜国立大学大学院Y-GSA修了後、引き続きiii architectsとして活動。

iii paper | 2020年 ——— iii architectsの活動は、大きな目的を定めず、それぞれの日々の実感を共有しながら進めている。その記録としてフリーペーパーを始めた。SNSやホームページなど、常時誰でもアクセスできる場所で消費されるのではなく、発行期間を絞った紙媒体として発信すること・手に取ってもらうことに価値を見出そうという試みである。



sisui | 共同開発=株式会社ダイクレ、2021年 ——— 豪雨時には雨の侵入を防ぐ止水ボックス、日常時には玄関先を彩るエントランスファニチャーの提案。都市でとれる土量の制限や、置く場所に困る土のうの現状から、現代の土のうとしての家具を考えた。建物の入り口のふるまいをリサーチし、置く向きや組み合わせが自由な形として設計することで、植木鉢や、傘立てなど日常的に使える防災家具を目指した。



itinerant tea room | 東京・高円寺、2021年 | 写真=西條杏美 ——— 旅をしながら喫茶を営んできた店主のための喫茶店。〈客・店員〉という属性で空間を分けるのではなく、〈静かな空間—動かな空間〉という行為の性質で空間を分けた。部屋の中央に厚みのある壁を1周させ、その壁に様々な孔をあけることで、1人で本を読む人、カップルでデートする人、厨房で仕込みをする人、それぞれの焦点がずれていく建築を目指した。



iii architects(スリー・アーキテツ)| 殿前莉世+平井末央+福留愛の建築家3人が共同主宰するコレクティブ。学部4年の卒業設計展で出会い、殿前と福留は佐々木泰樹育英会の奨学生としても交流を深めた。2018年、修士課程1年時からコンペなど3人で共同で制作をはじめ、学生時の代表的な受賞に「長谷工住まいのデザインコンペティション2018」優秀賞、「都市のパブリックスペースデザインコンペ2018」優秀賞など。大学院修了後も、神楽坂を拠点に活動。別々のバックグラウンドを持つ強みを生かしながら、国内外問わず家具から都市まで、多くの対話を通して設計している。『建築雑誌』の「TABLE OF YOUTH」(2019年12月号)、「LIXILビジネス情報」(www.biz-lixil.com)の「社会と住まいを考える(国内)」(2022年10月)に文章を寄稿。

寺田慎平 岩本早代 山田陽平 下田悠太

建築設計、独立前後のリアル

司会=長島明夫

日本で建築家になるには、大学あるいは大学院で建築を学んだのち、設計事務所で数年の経験を積んで(その間に一級建築士の資格を取得し)独立するというのが、一つの典型的なルートになっています。社会でまだ何者でもないその時期には、それぞれがそれぞれの期待や不安を抱きながら日々を過ごしていることでしょう。ここではある日曜日、独立前後の4人に集まっていただき、各自の状況について話をしてもらいました。4人には事前に全5問のアンケートを投げかけています。

てらだ・しんぺい——2017年度奨学生
1990年生まれ。2014年、東京大学卒業、同大学院(伊藤毅研究室)に進学。2015年、スイス連邦工科大学チューリッヒ校(ETH)に留学。2016年、バーゼルの Christ & Gantenbein でインターンシップ。2018年、東京大学大学院修士課程修了、同年よりムカ建築事務所に勤務。

いわた・さよ——2017-2019年度奨学生
1991年生まれ。2015年、横浜国立大学卒業。2017年、東京藝術大学大学院(中山英之研究室)修士課程修了、同博士課程に進学。2022年、同博士課程を単位取得退学し、建築デザイン事務所 waiwai に勤務。

やまだ・ようへい——2017-2018年度奨学生
1993年生まれ。2017年、武蔵野美術大学卒業。2019年、武蔵野美術大学大学院(布施茂スタジオ)修士課程修了、建築設計事務所 OYY (office yamada yohei) を設立。

しもだ・ゆうた——2020年度奨学生
1996年生まれ。2019年、東京大学卒業。2021年、東京大学大学院(佐藤淳研究室)修士課程修了(新領域創成科学研究科長賞)、同年より佐藤淳構造設計事務所に勤務、並行して個人のデザイン活動。

寺田 慎平

2023

【Q&A】4人への質問と回答

Q1 ー いま思う、学生時代しておくべきことは？

- 〔寺田〕 学生時代は旅行に行く時間がふんだんにあり、そんな経験は今でも自分の財産ですが、「設計」という観点でいえば、もののおさまりやディテールなど、建築のつくり方をもっと知っていれば、その経験をもっと実務に活かせただろうにと、考えることはあります。
- 〔岩本〕 旅行中に撮った写真には、1枚につきひとつコメントを残すこと。
- 〔山田〕 様々な分野の友人を作ること。
- 〔下田〕 自分が好きだという素材の発見と、その社会との接点についての考察、経験。

Q2 ー 働き始めてから最も重要な気づきは？

- 〔寺田〕 設計とは(基本的に)クライアントワークであり、セルフワークとは異なるということ。
- 〔岩本〕 今この時代に作られた建築は、今この時代の建築にならざるを得ないのだということ。
- 〔山田〕 仕事として設計を成立させるために必要な設計以外の業務に関するノウハウや経験の必要性。
- 〔下田〕 建築構造力学や建築幾何学の、領域横断的な応用可能性を感じています。具体的には、建築構造設計を通して身につけているスキルが、ファッションやアートなどの他分野との個人業務につながっています。

Q3 ー 現時点で自分にとっての最大の課題は？

- 〔寺田〕 設計におけるコミュニケーションスキルと、それが身につけばその先にあるはずの「探求すべきテーマ」の実現。
- 〔岩本〕 作り続けるためのワークライフバランス。
- 〔山田〕 設計やデザインのクオリティを上げるために時間やお金の分配をどう考え管理するか。
- 〔下田〕 具体的な材料物性や構築物と、抽象的な幾何学や構造解析の接続。また、それ等の間を高速で行き来できる思考。

Q4 ー 探究していきたい建築のテーマは？

- 〔寺田〕 ある領域のなかの「建築」について、あるいは都市をちょつと捏造すること。抽象的ですが、現代の都市というものの本気にせず、いっそ捏造してしまえば、そこに成立するはずの建築ももうすこし建てやすくなったりしないだろうかと思っています。
- 〔岩本〕 社会的共通資本としてのテラン・ヴァーグと建築。
- 〔山田〕 建築以前にただの形であるという地点に戻って考えること。
- 〔下田〕 新しい建築の形態を生み出す材料や施工法。月面や火星用の建築。ファッションや生物学からの情報の輸入。

Q5 ー いま100万円使えるとしたら何に使う？

- 〔寺田〕 旅行。特にブラジルに行きたいです。なるべく遠いところの風景をみることで、身近な風景と比較し、改善することができる気がするからです。
- 〔岩本〕 世界各地で気球に乗る。
- 〔山田〕 自身の展示やジンなどの製作費用。
- 〔下田〕 制作や研究に使える場所、材料、道具、研究対象物の購入。例えば、粉末照射の3Dプリンタの購入、イシガキフグなどの生物の飼育・研究など。

山田さんは3年前、武蔵野美術大学の大学院を出てそのまま個人での活動を始めました[fig.1]。今日の4人のなかでは唯一独立しているわけですが、アンケートの回答もどこなく現実的な切実さが漂っている気がします。Q1の「いと思う、学生時代にしておくべきことは？」に対しては、「様々な分野の友人を作ること」。これはどういう意味ですか？

山田 建築学科の友達は同業者なので、一緒に仕事することはあまりないんです。作ったものに関してお互いに意見を言い合うような関係はずっと続いていくとしても、僕がいま実際に仕事をしているのはグラフィックやシステム系の人だったりする。結局この先いいものを作りたいと思ったとき、自分1人では作れないという現実があります。建築の設計者にはキュレーション的な役割も求められるので、そこで力になってもらえる他分野の友人はいたほうがいいという意味です。



fig.1 | 《005-office》| 設計=山田陽平/OYY、2021年竣工 —— 印刷工場の一部を事務所リノベーション。機能的な空間として無機質になりすぎないよう、各要素のかたちや色、材質などに特徴を持たせて全体を構成している。| 写真=山田陽平

山田陽平

例えばサイン計画を自分でやるのかグラフィックの人に頼むのかでクオリティはかなり変わります。僕自身グラフィックはすごく好きですが、それを自分でやって経費を節約しようとは思ってなくて、専門でやっている人にきっちりお金を渡して、一緒にクオリティの高いものを作ることが重要だと思っています。そういう人間関係が構築できる環境は、じつは学生時代にあるんですね。僕は美大なので明らかにクリエイティブな人が多かったですが、たぶん美大でなくてもいろんなジャンルの人と知り合う機会はあるはずで。そこは繋がっておいでまったく損はないし、その後独立するきっかけにさえなるかもしれないと思います。

山田さんの学生時代の作品はいかに美大的というか、誰かとコラボレーションするというより、自律的で強いかたちを提案するようなものだった記憶があります。今回のアンケートの回答にも、そうした作家性と現実の業務との葛藤がうかがえました。

山田 たしかに僕自身は純粹に個人としての創作の意識が強くて、そこにどんな家具が置かれるかみたいなことは正直あまり興味がないかもしれません。僕はこのかたちを作るから君はこっちを作ってねぐらいの感覚で、とにかく守備範囲を自分の専門に絞っていきたい。そういう意味では昔から変わっていない。ただ一方で、学生時代は本当に

ぜんぶ自分でやっていたのが、人に任せられるようになった気もします。今はそれぞれのプロフェッショナルがいて、それで成り立つ総合体が建築だと考えているので。

学生のとときは卒業後のことをどう考えていましたか？

山田 学生時代はいろんな設計事務所でアルバイトをしていて、入りたいと思う事務所もいくつかあるにはありました。ただ、じつはもう在学中に住宅の仕事を請け始めていて、就職するとたぶんそれを進めるのが時間的に無理だった。独立願望も学部から持っていたんです。ムサビの大学院は一級建築士試験に必要な実務経験2年分に換算できるカリキュラムがあったので、学校を出たあとすぐに独立することも見据えて大学院まで進みました。学生時代に教授の自邸の仕事で現場の経験も持ったので、大学院を出て運がよければそのまま独立するし、駄目そうなら就職するし、別に30歳になってから就職してもいいしという、そういうことを総合的に考えて独立することにしました。

岩本早代——設計と研究のはざまで

岩本さんは大学院で博士課程まで進んで、4人のなかでいちばん学歴が長いですね。なぜ博士まで進学を？

岩本 修士課程の頃、建築の建っていない場所や設計されていない状況への憧れが強くて、悶々としていたんです。設計にはすごく興味もあるし、勉強もしてきたのになあと。このまま働き始めると、悶々と考えていることがなかったことになってしまう。それが怖かったというのと、じゃあ人間のためだけではない建築って本当にあるのだろうかとか



考え始めたとき、とてもワクワクして。それを一度しっかり腰を据えて考えてみたいと思ったのが博士課程まで進んだ動機です。



もともと学部は横浜国大でしたよね。そこから修士課程で東京藝大の中山英之さんの研究室に進学するという時点で、そちらの方向に舵を切っている印象もあります。



岩本 それもあるかもしれません。横国は建築や都市の力を信じ、そこに正面から立ち向かう思いの強い人たちが集まっている場所でしたが、私自身は本当にそこに邁進していけるのかという不安がありました。建築をすこし

引いて見たかったという気持ちもたしかにありましたが、でもだからといって中山研を選んだわけでもありません。もうすこし柔軟に、いろんな思想や背景を持った人と一緒に建築を考える時間があるといいなという、シンプルな判断だったと思います。

博士課程の5年間はどうか？

岩本 大学院ではテラン・ヴァーグ[fig.2]という、都市のなかに現れてくる空地のような場について研究していました。ただ、難しかったです。建築家がデザインすることができない場所への憧れは、私だけでなく多くの人が抱いている。でもそれを実際に社会のなかでプロジェクト化することを考え始めた途端、やはり何かしらの社会的な理由が必要になってくる。



fig.2——テラン・ヴァーグとは、その場所で起こった様々なことを想起させながらも、もはや空虚で占有されていない、不安定で曖昧な場であると同時に(未知性)や自由への期待を想起させる都市空間を示すフランス語の造語。| 写真=岩本早代

研究の一環で、「アニマルパスウェイと野生生物の会」というNGOの人たちと一緒に活動できたのは、私のなかの宝なんです。自然のなかに新しく道路を建設することで、もともとそこにいたリスやヤマネたちのけもの道が潰されてしまう、だからその小動物のための橋を作るという研究会です。メンバーは大手ゼネコンのOBの方が多く、他にも生物学者や環境コンサルなどをされている方たちがお互いの知恵を出し合って、どう作っていくかを考える、奇跡的に成立している団体だと思います。

私が関わったプロジェクトは、紀伊の山中で木が伐採されて、ヤマネが住んでいる場所の道が一時的になくなるという事態に対し、仮設の橋を架けるというものでした。そこで、その橋を誰が作ったのかが明確にならないのが面白くて。クライアントはいるのですが、その橋を実際に使うのは人間以外の動物なので、そこに向けてどう作るかという判断がすごくフラットにできる。特定の個人の価値基準によらないのが特異だし、希望を感じました。

_____ 大学院を出て働くという判断はどのように？

岩本 それまではわりと活発に動いていたのが、コロナ禍で家から出られずに、人と協働できなくなってしまったんです。それでどんどん思考が閉じていって、体調も崩れてしまった。そのとき、やっぱり建築をつくることの面白さって、人と議論しながら作ることなのだとあらためて思ったんです。それでとにかく実際に物を作る環境に身を移したいと、退学を決意して、設計事務所で働くことに決めました。

寺田慎平——平日の仕事と週末の議論

_____ 寺田さんも勉強は好きそうですね。博士課程に進もうとは思いませんでしたか？

寺田 修士で歴史系でしたが、設計をしたくてスイスに留学していたとき、ここからもう一度歴史系で博士課程

2

に行くのは遠回りが過ぎる、やっぱり社会に出て働こうというのは、そのときすんなり考えたことでした。

_____ 他の多くの職業と同様、建築の勉強も大学を出て終わりというわけではありません。寺田さんが仲間たちと運営しているメニカン[fig.3]も、大学を超えた勉強会みたいなものですね。

寺田 メニカンは学生時代に読書会の延長で始まっています。他のメンバーは僕よりすこし年下で、僕は留学から戻ってきた後に声をかけてもらいました。建築における言説の場が縮小しているとか、ディスカッションしようと思っても共通の言語がないといった問題意識で読書会をスタートして、それぞれ面白いメンバーが集まったので自己紹介がてらお互いレクチャーをしていこうという流れで今に至っています。最近ではテーマを建築から徐々に開いていて、例えば建築出身で演劇や音楽をしている人を呼んだりして、言説の場に広がりを持たせたいという問題意識になっています。

fig.3——メニカン(メニー・カン・ファレンス)は2018年設立、建築・デザインに関わる研究者・実践者の共同体。言説による領域横断を重視し、議論の場をつくる。現在の運営チームに、谷繁玲央、寺田慎平(2017年度奨学生)、中村健太郎、橋本吉史(2018-2022年度奨学生)、福留愛(2018-2019年度奨学生)、楊光耀(2018-2019年度奨学生)。



_____ その活動と、設計事務所のスタッフとして実務に携わることは、寺田さんのなかでどういう関係にありますか？



寺田 平日は事務所の仕事をして、週末にメニカンや他のことをやっています。だから設計実務ではできないことを週末に友達と議論しながら考えている感じがですね。



メニカンは自分で研究するのとも違って、人の話を聞いて自分の考えを柔らかくしたり、あるいは最近ではコロナでなかなかできませんが、実際にそこに集まってくる人たちと出会ったり、そういう効果を期待しています。山田さんと同じく、僕も学生時代はぜんぶ1人でやりたいタイプでしたが、メニカンを始めた頃から少しずつ気持ちが変わってきて、現実的に1



人では難しそうだというとき、いろんな人、とくに同世代と繋がりを作っておくのは大事だと思っています。

_____ 寺田さんが勤めるムトキ建築事務所は、一般的に見て作家的な強いアトリエ事務所だと思いますが、スタッフとしての仕事はボスのお手伝いで修行をしている感じなのか、それともそれなりに主体的に設計をしている意識なのか、どうでしょうか？

寺田 基本的に担当したプロジェクトは僕が図面を描いて現場監理もしますが、もちろん要素要素でボスに確

認してもらって進めます。僕の意見も出しますが、やっぱり100パーセント僕の興味関心で打ち合わせをしてもまらない。なので、たぶんどこもスタッフってそういうものだと思いますが、ボスと興味関心を共有しながら、この案ならば通るのではないかという駆け引きみたいなものも重要だと思います。

_____ Q2の「働き始めてから最も重要な気づきは？」の回答は、「設計とは(基本的に)クライアントワークであり、セルフワークとは異なるということ」。これについては？

寺田 これも当たり前のことですが、実務ではそれぞれのプロジェクトを自分の興味関心のど真ん中に持っていくことはできません。基本的に敷地があって、プログラムもある程度決まっているところから、お施主さんの要望をどう汲み取って設計していくか考える。そのなかで、ここだけは譲れないというところを死守することが作家性につながると思うのですが、でも果たしてそれを死守して実現することはどれぐらい大事なのか……みたいなことは気づきであり悩みであり、自分がいずれ独立したときにはどうすべきかと思うところでもあります。

下田悠太——構造デザインからできること

_____ 下田さんは学年がすこし下で、他の3人と会うのも今日が初めてなんですね。建築の奨学生は意匠の人が多いですが、毎年1人か2人は構造の人もいます。下田さんは現在、構造事務所に勤める一方で、個人でもデザイン活動をされていますが[fig.4]、構造という進路はどのように決めたのでしょうか？



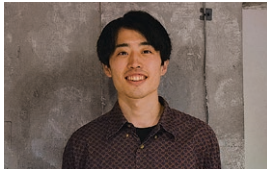
fig.4——コムデギャルソンの展開するブランド「noir kei ninomiya」の2021-2022秋冬コレクションの一部で、幾何学・構造デザインを担当。布に取り付けられた細い針金同士はお互いに接しておらず、布の張力とのバランスで形を保っている。おそらく史上初の「着るテンセグリティ構造」。|写真提供=コムデギャルソン

下田 大学で研究室を選ぶ段階で、意匠と構造、僕も本当はぜんぶやりたかったんです。けれども建築業界は分業化されていますし、やはりどれか選ばないといけない。そのときに自分がいちばん興味があるのが、かたちや材料の領域だった。ですから、今ある名前の付いた職業のなかで自分がやりたいことにいちばん近いのが構造エンジニアだったという感じです。

ただ、エンジニアリングはずっとパソコンに向かっている仕事なので、すこしはデザインもしてみたいし、物も

触りたい。その欲求を週末に個人のワークに当てています。いま僕の爪が青いのも別にお洒落をしているのではなくて、昨夜藍染をやっていたからなんです。

_____ 大学が佐藤淳さんの研究室で、そのまま佐藤さんの事務所に就職したということは、佐藤さんも下田さんのそういう志向を理解して？



下田 そうですね。もともと僕は折り紙が好きだったんです。それで建築のいろんな先生に、折り紙の研究をしたいのだけど卒論でやらせてもらえませんかと言に行ったら、佐藤先生だけが受け入れてくださった。事務所では本業に支障をきたさない範囲で副業も認められているので、今の個人活動も随時報告しながらやっています。

_____ 意匠の場合、大学を出て、アトリエ事務所です3年や5年修行をして独立するという道筋がある程度できていますが、構造の分野でもみなさん独立を目指しているのでしょうか？

下田 適判(構造計算適合性判定)や申請機関の構造部門に就職したり、もっと大きい組織の構造部門に転職することもあると思います。ただ、佐藤事務所はバリバリのアトリエ系なので、先輩たちも独立志向ですね。構造の職能として、基本的に意匠よりもスキルや資格の取得に期間を要するので、5年から15年いる人が多いですが、基本的なルートとしては構造アトリエと意匠アトリエと同じだと思います。

ただ、僕自身はあと数年働いたら博士課程に戻りたいと思っています。本当は修士からそのまま博士に進みたいぐらい、自分の作っているものについての探求を深めたいという気持ちはあったのですが、それが実際の建築にどう使われるかわからないまま研究をしてもトンチンカンなことになってしまいそうだったと思ったので、一度社会経験を積もうと就職しました。

_____ それも佐藤さんをご存知ですか？

下田 はい。最初にそのことを相談したとき、事務所に就職してからも大学に戻るルートはあるよと言ってくださって。

_____ 一般に構造家は建築家のデザインを助けるパートナーというイメージがあります。でも下田さんはもっと自分発のデザインをしていきたい？

下田 僕も学生のときは、構造は所詮パートナーで、名前もメディアにあまり載らなくて、おかしいじゃないかと思っていました。まあ、名前が載らないところはいまだにおかしいと思っていますが、でも実際にやってみて、パートナーとしてやるからこそ面白いものができるということも感じています。みなさん仰るように、やはり専門性のある人同士が高め合った先にこそ、よりよいものがある確率は高いなと。ただ、

構造のアイデアが先にあって成立するようなデザインは、そういうプロセスではできにくいので、どうすればそこに行き着くのかはまだ模索中です。

／ 建築の職能の拡張 ／

寺田 なんとなくみんな既成の職能をはみ出たものに興味があるのだけど、それをどう仕事に結び付けるかにもがいているのが共通していますね。佐々木育英会の人たちは、そういう人が多いのかもしれない。

山田 岩本さんのアニマルパスウェイの話はアーティスト的だと思います。社会的に仕事としてどう成り立つかという以前に、そこにあって然るべきものへ興味が向かっている。そういうのはちょっと懂れますね。僕も最近友人と、クライアントワークじゃない何かをしたいねという話をしているんです。

寺田 ただ、バランスですよ。それこそ(岩本さんのQ3の回答にある)ワークライフバランスみたいな。

岩本 やっぱり葛藤はありますね、お金にならないことを続けるのは。メニカンもそれでお金が発生するわけではないと思いますが、長く続いていますよね。とにかく続けるというモチベーションはすごく大事。

寺田 1人ではないのも大きいですね。続けていると誰かしら忙しくて離脱することはあるので、誰かは動いてくれるという状況をつくる。

岩本 本当に本業と副業という選択しかないのかな。

寺田 建築設計はいくらでもこだわり続けられる仕事だから、(経営面で言えば)コストパフォーマンスは悪い。そういう意味では、設計以外への興味関心が、別の収益を生む手段にもなるかもしれない。

下田 僕が副業的に活動しているのは、建築の職能を使って別の分野で定期収入が得られるものがないか探している側面もあるんです。メニカンもそういう可能性はあるかもしれませんが、山田さんだったらグラフィックのスキルを何かに使えたりとか。

寺田 山田さんは写真もいいんですよ。

山田 竣工写真は撮っていないけど、自分で毎回撮るようにはしています。設計のプロセスにおけるいろんな業務を展開する可能性はあるでしょうね。模型もそうだし、CGも専門でやる人がいるくらいだから。そういう可能性を一つずつ分解して考えていくと、設計事務所の新しいあり方になるかもしれない。

下田 VR(仮想現実)やAR(拡張現実)が流行りつつあって、そういうものを建築家が設計するとか、あるいは自動運転が進んでもっと建築的な車ができていくとか、そういうところに進出できたら世の中的にも建築家的にも豊かな

気がします。

寺田 でもあのドレス[前掲]は、下田さんのモックアップをファッションデザイナーの人が見たところから話がきたんですよ。

下田 そういうことがもっと大きいスケールで起きていくと嬉しいですね。意外とみなさん言っていることは一緒なんです。意匠の人はもっと片持ち梁を長くしたいと言い、ファッションの人はもっとドレスを大きく広げたい、でも材料を増やしたくない、みたいなことを言う。だから同じエンジニアリングの技術で解決できる問題が他の分野にも転がっている。

／ 社会の枠組みのなかで ／

寺田 ぜんぶやりたいという初期衝動はたぶん変わっていないんですよ。

山田 そう。やれるものなら今もやりたい。でも今ってそれこそVRみたいなもの多くて、それは手に負えないという感覚もある。だから僕としては、フィジカルなものはぜんぶやらせてくれという思いです。図面を引いていて思わず取っ手までデザインしていることもありますし。やっぱり予算がないから既製品を買うことになるのだけだ。

_____今の社会では、建築はコミュニケーションや経済の道具としての役割を求められがちですが、みなさんは建築そのもののかたちに関心が強いですね。岩本さんはそうでもないかもしれませんが。

岩本 私も「こういうかたちが好き」というのはありますが、自分の美意識をあまり信用していないのか、こうやりたいと思って描いてみるのだけど、そのかたちの必然性みたいなことを考え始めると、どうしても自分でぜんぶということにはならない。

山田 でも、自分でぜんぶやりたいというのはちょっと語弊があるんです。

寺田 一度ぜんぶ自分で考えてみたいという感じかな。それがベストでなければぜんぜん別の案でいい。例えば建築家として自分の名前を前面に出したいという気持ちは、そこにまったくないです。そこはコレボレイティブな関係もありえると思うし、むしろそちらのほうが健全な場合もあるのではないかと考えています。

岩本 さっき下田さんが、名前が付いた職業のなかで選ぶなら構造家と言われましたよね。その感じよくわかります。建築の職能がとても広いなかで、本当に自分に合うのは建築家なのかと思うところはある。

_____建築家の領域が曖昧になっているということはずいぶん前から言われていますが、それでも既成の職業の枠にあえて収まらずに、一つの軸を持って自分の仕事をしていく、それは生き方としてはきついことですね。

寺田 ここにいる4人はそのきつい道を選んでいる気が

します(笑)。

岩本 私は高校生くらいから興味が散漫で、漠然と「建築ならいろんなことができそう!」と思って建築を目指したんです。実際そうだったのでよかったと思っているのですが、たしかに名前を付けられないポジションで自分の生活をどうにかしていこうとなったときには苦しいところもある。そういうのって、大学の学部や修士のあたりでほとんどの人が気づいて、そろそろここに落ち着くかということで就職していくと思うんですけど。

寺田 奨学金をもらってしまったことで落ち着けなかったのかもしれない(笑)。

_____ 佐々木泰樹育英会では建築の奨学生の応募条件として、(待遇のよい)ゼネコンや組織設計に就職せずに独立を目指す人という規定があります。今日のこのすこし重たい話題も、そういう最初の入り口があって集まってきてくれた人たちだからこそなのかもしれません。

山田 僕はどこにも就職しなかったの、学生の延長で仕事をしている感じが強いんです。今も仕事を始める最初、とりえずスタイロ(模型材料)をいじったりする。建築をやるって僕のなかではスタイロをいじったり変なディテールのモックアップを作って「これだ!」と言っている、結局そこなんです。お金の問題はたしかにあります、それを切り離してしまえば、学生の頃となんら変わっていない。そういう意味では奨学金をもらって、余計なことを考えずに学生時代を過ごせたのはすごくありがたかった。

岩本 同じ大学の出身者だけとか、限られたコミュニティのなかにいると、名前のある職業に就く人の割合が多くて、そこから取り残される不安感みたいなのも生まれてくる。でもこうして集まると、山田君も苦労してるし大丈夫か、みたいな気持ちになれます。

寺田 その開放性も育英会のよさですね。みんなで旅行に行って仲良くなれたのも大きかった[fig.5]。



fig.5——2017年度、建築奨学生8名でスリランカのジェフリーパワの建築を視察した旅行での写真。佐々木泰樹育英会では新型コロナウイルス感染症によるパンデミック発生以前、2017年度から2019年度まで、建築奨学生の海外研修旅行を助成した。| 写真=岩本早代

／ 今この時代の建築 ／

_____ そろそろ終わりの時間ですが、Q2の岩本さんの回答が意味深で気になりますね。「今この時代に作られた建築は、今この時代の建築にならざるを得ない」。



岩本 私は大学院で、人も建築も存在しない世界をずっと観察していたのですが、そこから建築に戻ってきていざ作り始めたとき、やっぱりクライアントがいないと建築はできないし、施工や構造や設備の人もいないと作れない。あとはよい材料がなくても、思いどおりのものは作れない。だから今この時代に一緒に生きている人と今あるもので作るということが大前提としてあるということがしみじみと実感されたんです。

今はそれこそウッドショックとか、鉄骨の値段が以前の3倍みたいな状況でみんな苦労しながら作っているから、この感覚は共有しやすいと思います。でもこれって戦後すぐの時代も一緒だったのだろうなと考えると、その頃はその頃で限られた材料で美しいものを作っていた建築家がたくさんいた。だから今この時代に作るというのは、今この時代の人間にしか与えられない特権なのだと思っています。

_____ あの回答はネガティブにも読めましたが、どちらかというポジティブな意味だったんですね。

岩本 どちらもありますね。でもそれだったら思い切りポジティブに捉えて作りたい。

山田 今の話は僕も共感します。材料にしても本当に目の前にあるものしか使えないので、まさに今の時代が標本のように建築化されていく。でも一方で、かたちというのは意味が曖昧で、時代を超えるものでもあるから、この時代を反映しつつも長く残る建築を作りたい。

下田 僕も就職して感じるのは、使える材料を既存のルールのなかでどう工夫して使うか、その面白さですね。たぶん新しいものを作るには、まず今の材料と技術をしっかり自分のものにしないといけない。それを身につけたあとで、どれだけジャンプができるかなと。

寺田 やっぱり作りながら考えるというのは、いちばん贅沢な時間だと思うんです。今この時代の建築にならざるを得ないのだけど、それをどういうふう、より広い射程のなかで考えられるか。それはもかき続けたいなと思いますね。

_____ 「今」を実感するのも俯瞰するのも、きっと真摯に建築と向き合っていればこそなのだと思います。みなさんの今後に期待しています。

大谷陽一郎

おおたに・よういちろう 2019年度後期奨学生

1990年生まれ。2015年、桑沢デザイン研究所卒業。
2018年、東京藝術大学大学院美術研究科デザイン専攻(企画理論研究室)修士課程修了、同博士課程に進学し、2019年まで中国の清華大学へ交換留学。著書・作品集に「雨 大谷陽一郎作品集」(リトルモア、2017年)、「かんじるえ」(福音館書店、2021年)。NONIO ART WAVE AWARD 2020 グラフィック・イラストレーション部門グランプリ。

「かんじるえ」| 福音館書店、2021年——は、絵がすべて漢字だけで描かれた字だけの絵本です。点描画のように色とりどりの小さな漢字をしきつめて、様々な夏の風景を描きました。ここに掲載した場面は虹のかかる田園風景。「虹」「稻」「山」など計6種の漢字を使用しています。



修士課程修了後は博士課程に進学し、「視覚詩」という視覚性を取り込んだ詩形式について研究を進めてきました。線行や文法から文字を解放し、空間を意識した画面のなかで文字を布置する作業が視覚詩には伴います。そこに生じる従来の文字組では得られない文字の相互的なつながりに興味をもち、「多方向性」と「多焦点性」という二つのキーワードを設けて、新国誠一や萩原恭次郎の詩を分析してきました。

このテキストを書いている今(2022年10月)は、12月に行われる博士修了展と論文審査会に向けて作品制作と論文執筆に励んでいます。博士展では無数の漢字を用いて雨をモチーフにした大型の平面作品を展示する予定です。

問題なく進めば、2023年3月に博士課程を修了します。その後は、どのような手段で行くかはまだ未定ですが、中国に渡って漢字と視覚詩の関係について研究したいと考えています。



若田勇輔

わかた・ゆうすけ ——— 2019年度奨学生
1995年生まれ。2017年、武蔵野美術大学卒業。2021年、東京藝術大学大学院美術研究科デザイン専攻(第9研究室)修士課程修了。現在は広告代理店でデザイナーとして勤務しながらアーティストとして活動。〈uskin〉(学生時代の作品、金澤佐和子と共同)でTOKYO MIDTOWN AWARD 2020 デザインコンペグランプリ、国境なき医師団の海外派遣スタッフ募集広告(内山智義と共同)で2021年度朝日広告賞(一般公募の部)準朝日広告賞を受賞。

大学を卒業後は広告代理店に入社し、グラフィック、空間デザイン、UI/UX 設計など幅広い業務を行いながら、個人ではアーティストとして展示や自主制作などを行っています。卒業後に商品化した(hadawa)という指輪(www.hadawa.jp)では、日本ではまだまだ浸透しきっていないと感じられる「多様性」に対するメッセージを指輪のデザインに込めることで、重いと思われるテーマをだれもが共感できる体験に変化させました。Tokyo Midtown Design Touch 2022というイベントでアーティストとして展示した作品では、種によって違う心拍のリズムを用いて光の彫刻を作ることで、生命の繋がりを幅広い層が感じられる空間を制作しました。アーティストとして様々な課題と向き合いながらデザイナーとしても技術と知見を広げることで、多くの人が共感できる「体験」をつくる活動をしています。

佐々木 崇徳 氏 氏

2023

uskin | 商品名 hadawa、金澤佐和子と共同、2020年 ——— uskin は肌の色のグラデーションを落とし込んだリングです。黒から白までの肌の色のグラデーションを身に着けることで「多様性を受け入れる」という思想を、ざりげなく纏うことができます。



国境なき医師団の広告「救急車の音が聞こえるって、幸せなことだ。」 | 内山智義と共同、2022年 ——— 朝日広告賞の公募部門にて「救急車の音が聞こえるって、幸せなことだ。」というコピーで広告を制作。紛争地域では救急車すら走っていないという事実に着目し、ネガティブなイメージのあった救急車のサイレンの価値を捉え直した。



大小田万侑子

おおこた・まゆこ——2019-2020年度奨学生
1992年生まれ。2016年、横浜国立大学教育人間科学部美術科卒業。2018年、東京藝術大学大学院修士課程修了。2021年、同大学院博士課程修了、論文「物語性と藍の型染による生命感のある表現について」および作品《はじまりのうた》で博士号を取得。同年より東京藝術大学美術学部工芸科(染織研究室)教育研究助手。近年の個展に「大小田万侑子展——いつか満ちる月の光へ」(Hideharu Fukasaku Gallery Roppongi, 2022年)など。

大学3年生の終わりに型染という染色技法を知り、自分もやってみたいと思い沖縄県西表島へ染めの勉強に行ったことが創作のきっかけです。西表島で藍染を学び、型紙を彫ることで模様を生む型染のプロセスについて制作を通して知り、型と藍抜染の染色技法による現在の表現スタイルに至りました。東京藝術大学大学院で型と藍抜染の表現を追求し、卒業後も同大学染織研究室で助手をしながら制作活動を行っています。

作品は神話、昔話、伝説などをテーマとしています。人や動植物、架空の生きものを躍動的に描き、古来伝わる神話における日本人の自然への憧憬、目には見えない神々への畏敬の念を作品に込めて制作を行っています。今後の展望として、型染の模様により物語が展開される絵本作品をメインとした創作活動をしていきたいです。また引き続き、型と藍抜染の美しさを追求していきます。

佐々木 泰樹 写真

2023

新月をまつて(部分)



左 | **新月をまつて** | 樹木布、藍・型染、藍抜染、1890×440mm、2021年——月、細胞、妊婦をテーマとして制作。
右上 | **手をのばした青い空の向こう側に** | 樹木布、藍・型染、藍抜染、450×280mm、2021年——文章の挿絵として制作。
右下 | **光に降りる、広がる中樞** | 樹木布、藍・型染、藍抜染、2300×3000mm、2021年——誰もみたことのない地球の核へ思いを馳せて制作。



高良真実

高良真実さんは大学卒業の2022年、評論「はじめに言葉ありき。よろずのもの、これに抛りて成る——短歌史における俗語革命の影」で、第40回現代短歌評論賞を受賞されました（『短歌研究』2022年10月号掲載）。高校の卒業アルバムのために初めて短歌を作った高良さんは、その後、作歌とともに評論も執筆するようになり、現代短歌評論賞への応募はこれが4回目のことでした（前回は次席）。なぜ創作と評論を並行させるのか。受賞作を振り返りながら書いていただきました。

たから・まみ——2019-2020年度奨学生
1997年、沖縄県生まれ。同人誌『漣』、竹柏会所属、早稲田短歌会出身。2022年、早稲田大学社会科学部を卒業、第40回現代短歌評論賞を受賞。現在会社員。

法権の回復 天が^あかたむけば天よりこぼれくる螺^ね子あまた
乱れ^おの青年笑むに笑みかへし受け取らざりき神も思想も
街灯と月との蝕^くよ天国にあらねば門はたやすくひらく
近代史の論述を終ふ 月は我が累計筆記距離より遠し
音楽の授業へ夢に行くときは笛を忘れつ 笛を聴くのみ

高良真実自選五首

言葉の鎖／歌の鍵束

現代短歌評論賞を得なければ部屋の更新料を払えなかった。主の祈りの一節には、「我等の日用の糧を、今日も与へたまへ」とあるが、まさかこのような形になるとは……。受賞にあたっての副賞は10万円である。更新料の支払いには丁度良い。まことに肝が冷える思いであった。普段から資料集めという名目で書籍に散財している身には、良い薬になったように思う。

閑話休題、現代短歌評論賞とは短歌研究社が主催する短歌関連の公募評論賞だ。結果は毎年雑誌『短歌研究』の10月号に掲載される。第40回となる2022年のテーマは、①口語短歌の歴史的考察、②ジェンダーと短歌、③「疫の時代」の短歌のうちから一つ選択する形式であった。私は「①口語短歌の歴史的考察」を選択した。

口語（話し言葉）は書かれた時点ですでに口語ではない。それは書き言葉だ。実際のところ、口語歌集として名高い俵万智の『サラダ記念日』には、ひとことの話し言葉も書かれていない。

「この味がいいね」と君が言ったから
七月六日はサラダ記念日
愛人でいいのとうたう歌手がいて
言ってくれるじゃないのと思う
俵万智『サラダ記念日』（1987年）

この主張はにわかに信じがたいかもしれない。しかしよく考えると、誰かの発話が五・七・五・七・七になっていたら奇妙ではないか。与謝野晶子は^お大正期に、口語短歌の試みに対して「口語では^おこんなに変な調子で物を云はない筈です。」（『晶子歌話』天祐社、1919年）と非難を投げかけている。想像してほしい。食事中に誰かが「この味がいいね」と君が言ったから七月六日はサラダ記念日」と発話したとして、あなたはこの発話を、普段通りの発話として受け取ることができるだろうか。私は間違いなく戸惑う。いかにも、“口語では^おこんなに変な調子で物を云はない筈”だ。

このように、引用歌はどちらも口語（話し言葉）とは言えない。いや、短歌すべてが発話とは言えなくとも、発話が一部引用されているのだと、まだ反論される余地はある。確かに、「言ってくれるじゃないの」と表記通りに発話することは可能だ。しかし、このフレーズを読む全ての人の発話はそれぞれ異なって

れるが、兵役を経験した知識人としての社会
詠も多い。正直なところ、芳美の社会詠の説
教臭さには辟易してしまう。ところで、フェミ
ニストを名乗るラッパのあっこゴリラは、イン
タビューの中で「リリックはブラカードじゃな
いよ」と言っていた(『ele-king vol.27』Pヴァイン、
2021年)。そう、ほんとうに、多くの社会詠に
対して、「短歌はブラカードじゃないよ」と思う。
しかし引用歌は良い歌だ。夏の白樺林の描
写であると同時に、「はがねの匂い」によって、
「雷雨」には銃弾の雨の影がまわりつくよ
うになる。短歌でなにかを批判し、それが社
会を変えることを信じている歌には、その語
気が強ければ強いほど言葉の無力さを感じ
てしまう。それとは逆に、怒りや諦めやかな
しみが交ぜになったこの歌に、私は祈り
を見いだしている。

まつぶたつに割れてゆく時間の底にありて
あの顔が今はげに遙かなり
前川佐美雄「白鳳」(1941年)
とても私。きましたここへ。とてもここへ。
白い帽子を胸にふせ立つ
雪舟えまだんぼるぼる(2011年)

これらの歌を社会批判の文脈に引きつ
けて読む必要はない。だが、実のところ、言
葉で何かを表現することは思った以上にまま
ならないのではないか。読者としては「あの
顔」が誰の顔かもわからなければ、「きました
ここへ」と言われてもどこに来たのかわから
ない。わからないながらも、「時間の底」から
見上げるときの寂寥さや、「ここへ」来ること
への決意の強さは、感じ取ることができると
思う。私たちが言葉の鎖にまみれて生きてい
るならば、歌集は美しい鍵束だ。誰かの歌は、
稀に誰かの鎖を解いてくれることがある。

旧約聖書のなかで、古代イスラエル人は
ことあるごとに「神は生きておられる」と宣言
する。その瞬間、まぎれもなく、彼らの心の中
に神は生きている。私は歌集を読み、評論を
書き、その祈りが生きていると宣言したい。
書き手が死んでも、読み手がいる限り言葉は
生き続ける。願わくは、短歌がいつまでも生
き続けますように。私の評論はそのために書
かれている。

ストピアを描いたSF小説だ。実際に言語が
どの程度私たちの考え方に影響を与えてい
るかは議論が分かれるらしい。しかし私たち
は、良い意味を込めて「雄々しい」と言い、非
難の意味を込めて「女々しい」と言う。あるい
は、地図では北にある北海道や東北出身の
人たちも、東京に移住することを「上京」と言
う。言葉のもつ社会的作用と権力の関係は、
「ディスコース(英)」ないし「ディスクール(仏)」
と呼ばれる。ミシェル・フーコーの権力論に
由来する概念だ。現在ではフェミニズム研究
やカルチュラル・スタディーズの理論的基礎
となっている(参考:中村桃子「ことばとフェミニズム」
勁草書房、1995年)。言葉は思いのほか中立的
ではないようだ。そう考えると、実のところ私
たちの言葉は国家や家父長制の植民地なの
かもしれないと、少しおそろしくなる。

しかし怪物キャリバンは次のように罵
る。「あんたは言語を教えてくれた、それで
俺が得したことといやあ、/どうやって呪うか
を俺が知ったってこと。赤い疫病でくたばり
やがれ/俺におまえたちの言語を教えてくれ
たお礼にな!」(シェイクスピア『テンペスト』第1幕第2
場、本橋哲也訳、インスクリプト、2007年)。この戯曲
は、魔女の息子キャリバンが暮らしていた島
に、プロスペローとその娘ミランダが漂着し
て12年経過したところからはじまる。ミランダ
はキャリバンに言葉を教え、プロスペローは
キャリバンを奴隷として使役した。そしてこれ
は、20世紀の脱植民地化の過程で再解釈さ
れてきた戯曲でもある(参考:ロブ・ニクソン「カリ
ブ海世界およびアフリカにおける『テンペスト』の領有」、
前掲『テンペスト』収録)。この前提のもとに、キャ
リバンが二人に投げかけた台詞は福音では
ないか。キャリバンは、言葉は決して隷属を
強いるだけの存在ではないと宣言している
のである。

言葉への愛と憎悪と、期待と幻滅が入
り混じった矛盾の中に祈りは成立する。所与
の国語と、表現への欲求がぶつかるその瞬
間を、私はたまらなく美しいと思う。私の作歌
と評論の動機はここにある。

白樺に蟬はしきりに鳴き落ちて
めぐる雷雨のはがねの匂い

近藤芳美(男性)は戦後派を代表する歌
人だ。戦後の抒情を牽引したことで評価さ

いるのではないか。加えて普段の会話を注
意深く聞けば、「言ってくれるじゃないの」とい
う旨の発話をするとき、人は五十音表にない
音を口から出すこともある。その言葉を表記
できるだろうか。書かれた時点で発話のイン
トネーションやアクセントも抜け落ちる。ゆえ
に、発話された音をそのまま書くことはでき
ず、かつ書かれたものを用いて、元の発話を
再現することもできない。

だとすれば、話し言葉と書き言葉の両
方を意味する「口語」とはなんなのだろうか。
今回の評論ではこのような疑問を核として、
思考と発話と書記が直列した「国語」なるも
のが想像されてきた歴史をふまえ、「国語」と
方言と近現代短歌の関係を考察した。書くこ
とと話すことの間には無視できないほどの
亀裂がある。その亀裂は、方言について考
えるとき、ことさらに見えやすくなる。

私はかつて佐々木泰樹育英会の口語
詩句奨学生に採用されていた。だが現在は
口語で短歌を書いていない。思考と発話と
書記それぞれの断絶を覆い隠す「口語」の世
界はどうにも住みにくいのである。

ともあれ評論賞を得たことで、私はよう
やく書き手としてのスタートラインに立った。
問題は、なぜ実作と並行して評論を書いてい
るのかだ。ここから先は信念や信仰の問題
になる。その話をするために、少し回り道を
させてほしい。

まこと日本語は所与のものである。私
たちは言葉を覚える際に、言葉の規則をた
だ受け入れるしかない。日本語は私たちが生
まれる以前からあった。「太初に言あり、言は
神と偕にあり、言は神なりき。この言は太初
に神とともに在り、萬の物これに由りて成り、
成りたる物に一つとしてこれによらで成りた
るはなし」(明治元訳ヨハネ1:1-3)。現実に対して
言葉が与えられるのではなく、言葉によって
既にものごとが切り分けられており、それが
現実を構成する。このテーゼは「言語論的転
回」として広く知られているものだ。私はヨハ
ネ福音書の冒頭をこのように解釈している。

ここからもう少し想像力を働かせたい。
もし言葉が現実を構成するのであれば、そ
れぞれの言語はその話者の考え方にも影
響を与えるのではないか。これはサビア＝
ウォーフの仮説と呼ばれるものだ。ここで思
い出したいのはジョージ・オーウェルの小説
『一九八四年』(1949年)である。作中では、全
体主義的な体制を確立したビッグ・ブラザー
率いる「党」が、英語(小説では「オールドスピーク」)
を元にした「ニュースピーク」という言語を普
及させることで、反体制的な考え方そのもの
を放逐しようと試みていた。

もっとも、『一九八四年』はいわゆるディ

暮田真名

句集の刊行とこれから

聞き手＝小島なお(口語詩句選考委員)

「いけにえにフリルがあって恥ずかしい」。これは日本語の定型詩のなかでもとくに川柳を専門とする暮田真名さんの出世作です。暮田さんは2020年、『はじめまして現代川柳』(小池正博編著、書肆侃侃房)に最年少で作品が収録されて注目を浴び、大学院在学中の2022年、句集『ふりよの星』(左右社)が出版されました。ここでは口語詩句選考委員である小島なおさんを聞き手として、暮田さんに創作についてうかがいました。

くれだ・まな———2020・2021年度奨学生

1997年生まれ。早稲田大学大学院文学研究科日本文学コース修士課程在籍。川柳句会こんとん主宰、『当たり』同人。川柳句集に『ふりよの星』(左右社、2022年)のほか、私家版で『補遺』(2019年)、『べら』(2021年)。

こじま・なお

歌人。1986年生まれ。コスモス短歌会所属、同人誌『COCOON』編集委員。2004年、角川短歌賞受賞。歌集に『乱反射』(角川書店、2007年、現代短歌新人賞・駿河梅花文学賞)、『サリンジャーは死んでしまった』(角川書店、2011年)、『展開図』(終書房、2020年)、その他の著書に『短歌部、ただいま部員募集中!』(千葉聡と共著、岩波書店、2022年)。2021年度より佐々木泰樹育英会口語詩句選考委員。



暮田真名『ふりよの星』| 左右社、2022年———Z世代のトップランナーによるネオ川柳。言葉を限りなく自由に操り、読んだ者を骨抜きにする、魅惑の250句。(出版社宣伝文より)

『ふりよの星』より十句 | 小島なお選———「ふりよ」は不慮。思いがけないこと。句のなかの言葉は、意味や理屈からひととき解き放たれて、好き好きの閃光を見せてくる。自身を含めた誰も信用せず、同時に誰をも信じている言葉を信じてみたくなる句集。

暗くないなら寿司ではないよ
みんなはぼくの替え歌でした
おいしくて強い煙草になりなさい
生き字引、きもちよさそう、すずしくて
未来はきつと火がついたブリクラ
故人はとて、プロペラでした
銀色の曜日感覚かつこい
最近の中華料理は揮発性
土偶のように敵をつくつて
心臓は客寄せパンダだからです

／『ふりよの星』の面白さ／

「『ふりよの星』、あらためて刊行おめでとうございます。この本をきっかけに暮田さんや川柳のことを知った人もたくさんいると思いますが、反響はいかがですか？」

暮田 やっぱイメージしてた川柳とぜんぜん違うということはけっこう言われました。

「私もこの本を読んだとき、川柳って今こんなに面白いことになっているのかと驚きました。最初から川柳一本ではなかったんですね？」

暮田 川柳は2017年からです。もともと高校生のときから短歌を読むのが好きだったので、せっかくだしと思って大学1年で早稲田短歌会に入りました。でも短歌はどうも長いなと(笑)。それで俳句もしてみましたが、季語が難しくて。

「いろんな詩型にチャレンジするなかで、暮田さんには川柳が合っていたと。口語詩句サイトに投稿していたのも川柳ですか？」

暮田 口語詩句は2018年からなので、基本は川柳です。ごくまれに短歌も出したかもしれませんが。

「私が選考したなかで、2021年6月の投稿でね、「春の電気を/つけばなしで」。この頃の作品と『ふりよの星』はすこしテイストが違いますよね。

暮田 『ふりよの星』がベスト盤的なせいもありますが、口語詩句に出したのはだいたいぶ抑えめというか。

「たしかに『ふりよの星』は、よい意味でやりたい放題で突き抜けている。「好書好日」のインタビュー記事(2022年6月2日)では、作品を作るときに理屈を持ち込みたくないと言われていました。他人にはわからなくても自分なりの理屈を持って作品を作っている人は多いと思いますが、暮田さんはそうではない？」

暮田 そうですね。自分がわかるものをあまり信用していないというか、それだと私がわかる範囲のことしか書けない。そこを出ていきたい。書いていて意味はわからないけ

どなんとなく面白いというラインを探しています。

_____ どの句もあまり暮田さんの実生活から生まれているように見えません。私性という言葉がありますが、たった1人の生きている私がこの作品を書いていますという主体像、作品の背後に作者の人生が見えてくることが短歌の場合は多い。でも『ふりよの星』の作品は、自分のことを歌っていても、あまり自分にこだわっていない。たとえばこの「みんなはぼくの替え歌でした」(p.19)も、「ぼく」と言いながら自意識が涼しいというか、自分を手放す感じがあります。

暮田 はい。短歌をやっていたときに、やっぱり自分のことを書いたほうがよさそうな空気を感じたんですけど……

_____ そうなんですよー(笑)。

暮田 でもそれって素敵な精神生活があってこそですね。私の内面を書いてもそんなに素敵な作品になる気がしなくて。

_____ どういう情熱で川柳を作っているのかな。いちばん根底にあるのは「面白い」という感覚ですか？

暮田 そうですね。詩を書く人って美しいものを作りたいとか、自分の気持ちを届けたいとかってあると思いますが、私はそれよりも面白いものを面白いなと思ったときに句を作りたい。ただ、あまりにも自分で見て笑えるような句になったときは、笑えるということは自分でわかっているということなので、それは落とすようにしています。どうしてこれが面白いのかわからないけど笑っちゃう、みたいなのが好きですね。

たぶん今の私にいちばん強く影響を与えているのはお笑いなんです。学部時代は本当に芸人の追っかけをして4年間過ごしましたし。でもお笑いは人の目の前で演じて、直後に反応をもらうところまでがセットの芸なので、目の前にいる人がわからないようなことを言っている。それに比べると詩歌は、読んだ人の反応を目の前で見届けられる必要はないので、そのぶんだけ意味がわからないことが言える。

／ 作品の作り方 ／

_____ 「未来はきっと火がついたプリクラ」(p.60)も笑っていいのか、あるいはけっこうな角度を付けた社会的な眼差しなのか。プリクラというのがそもそも前時代的で、我々の虚像を映すようなものですね。それに火がついている。もしかするとこれはすごいシニカルな句なのか、という気もする。自句自註はしたくないかもしれませんが、この句はどういう思いで？



暮田 これは私的にはときめきワードを詰め込んだ句です。プリクラもいいし、「未来」は単語として大きいというか、詩に使うことはあまりない気がして、逆にそれを使うのがやばいみたいな感じで使っています。

_____ この「未来」にはそのやばさがあるのか。なるほど。

暮田 なんか、愛とか、普通は詩に使わない言葉を使っちゃおうというのもわりとするんです。あと私がポエティックなものを作ろうとすると、いろいろ燃やし始める(笑)。だからこの句は本当にポエティックをやろうとして作ったと思います。

_____ 未来みたいな大きなものを歌うときの逆方向からの攻めというのかな。そのマインドは、たとえば「故人はとても、プロペラでした」(p.64)という句にも感じます。この読点がいやらしくて(笑)、ここで一度、言葉や意味を溜めているんですよね。死に纏わる重たい空気のなかで言葉を継ごうとしている主体がいるのに、プロペラで外してくる。

暮田 未来とか愛とか、死に関する言葉もそうですが、大きな意味を持つ単語って、展開が出来上がっていると思うんです。未来は大切にしないといけないし、愛も生きる上で大事だし、故人のことは敬わないといけないし、みたいな共通の見解がありますよね。だからその言葉の周りに集まってくる言葉も固定化されがちになる。でもそこにプロペラみたいな、遠くにあった単語を入れてみると、新しい回路が出来上がって言葉の周りが耕されるのではないかな。そういうのはわりと好きです。

_____ 暮田さんの作品は、けっこう懐かしい言葉が出てきますよね。「煙草」や「土偶」もそうで、「客寄せパンダ」も(笑)。単語が内包する歴史の範囲が意外と広い。

暮田 この先使われなくなりそうな言葉はやっぱり使っておこうってなります。そういう言葉って面白いですし、いったん拾い上げて川柳にしとかなないと、みたいな。

_____ 本を読んで探したりもしますか？

暮田 本を読んでというよりは話し言葉から拾ってくることが多いですね。今の単語面白いなっていうのをスマホのメモ帳に書き留めて、締め切りが近づいてきたらそれを見返して、この単語を五七五にしようという感じで作る。



小島なお

暮田真名

暮田さんの句で、派手にきらめきを放っているのは名詞ですよね。それに対して助詞の使い方がとても真っ当なんです。句全体は安易な理解を拒絶して、よい意味でキツチュで破壊的な美意識があるのだけど、これで助詞まで壊れていると、本当に意味が取れなくなる。でもきちっと意味を立てていく助詞の使い方をしていから、名詞が好き放題できている。

暮田 イメージですけど、俳句ってすごく助詞に負担をかけるというか、助詞の力をどこまで引き出せるかみたいなことをやっていると思うんです。でも私の趣味として、どちらかというと名詞が好きなので、助詞には無理させない。そんなに助詞にこだわっていないのかもしれない。

はたから見れば川柳も俳句も短歌も、五音と七音で構成されているという意味で、たぶん似たようなものに見えと思うのですが、川柳だからできることって、暮田さんはどう考えていますか？

暮田 平たく言えば自由度が高いということでしょうか。俳句は踏まえなといけない前提が多いし、みんな高い塔を築き上げていくみたいな性質があると思うんです。それに比べ

て川柳は自由度が高く、短歌に比べて説明をしなくてもいい。この五七五を上句にして、そこに下の句をつけて短歌にしましうってなると、やっぱり上の句の説明をしないとけない気になってくると思うのですが、川柳はその説明をしなくていい。好きなことを言うだけ言って、じゃ！って立ち去れる(笑)。

そういう川柳の自由さを好んで集ってくる人たちは確実にいるでしょうね。「生き字引、きもちよさそう、すずしくて」(p.46)という句はよくわかります。「生き字引」も久しぶりに聞く言葉ですね。「生き字引」ということはその人の中に言葉がたくさん詰まっているはずなのに、でもたしかに涼しそうだし気持ちよさそう。身の涼しさだけでなく心の涼しさを感じます。川柳の場合、「気持ちいい」とか「涼しい」とか、自分の主観的なワードも普通にに入れていくのでしょうか。普通は嬉しいや悲しいといった感情語をいかに使わずにして詩を作るかというのが問題になる気がしますが。

暮田 そうですね。「いけにえにフリルがあって恥ずかしい」(p.16)が今のところの私の代表句みたいになっていますが、そこでも「恥ずかしい」という言葉を詩に使うのは珍しいかもという意識で使っていました。受容のされ方としても、



詩人 水瀬 夢 詩 人

「こんなふうに恥ずかしいを使う世代が出てきたのか」という感じで受け取られたみたいで。だから川柳でもあまり一般的ではないと思います。

／ 自分を緩める言葉 ／

基本的に口語ですね。

暮田 最近特になんですけど、書き言葉恐怖症で、一字空けもできなくなってきた。自分で一字空けをすると、書き言葉じゃないと思うんです。

一字空けでも？

暮田 はい。読点もちょっと書き言葉だなんて思います。だから句の形がずんどうなものしか作れなくなっている。でもそれがいちばん自然に感じられて、やっぱり私の領域は話し言葉だという意識が最近強いんです。

短歌でも、文語と口語のどちらで書くかという問題があります。文語だと「詠む私」というモードで、普段の自分とはすこし違う位相から言葉を発する、文語がその切り替えをする装置になる。暮田さんが喋り言葉を重視するのは、「句を作る私」より「普段の私」でいたいという感覚なのかな。

暮田 私の場合、ものを書くとき専用の私ではないほうがいいですね。物書きモードだと嘘くさく感じてしまう。気どっているというか。

文体の違いは大きいですね。

暮田 私は日常生活において考えが凝り固まりがちなんです。

そんなふうに見えない……

暮田 いえ、中高時代が進学校で、バリキャリ(バリバリ働くキャリアウーマン)たれ！みたいな学校だったこともあり、人はこうあるべきみたいなのをけっこう強く内面化してしまっている。だからすぐに思い詰めてしまう自分の考え方に対して、それを緩めたい気持ちがあるんです。あらたまって物書きモードになるよりは、普段の自分をほぐすような言葉を素の自分の状態で作りたいと思っているところが、あると言えばありますね。

表現する手段を持っていることは幸せだけど、すべての人に必要なことではないですね。暮田さんにとって表現することは、どんな効果があるのでしょうか。

暮田 確実に楽にはなったと思います、川柳があることによって。最近だと奨学金をいただいたり仕事をいただいたり、現実的に助かっている面も出てきていますが、それだけではなくて、やっぱり自分の考えを緩めるみたいな意味で、普段生きている社会の通念みたいところとぜんぜん関係ない言葉を自分の中で持てるようになった。それがだいぶ私にとっては癒しというか、ヒーリング効果があるのだと思います。

_____ 今も学生ですね。大学院ではなんの研究を？

暮田 ときざねしんこ 時実新子という川柳作家の作家論を書くことになっています。資料収集は済んでいるので、あとは論文にするだけなのですが、論文の書き方があまりわからないというところで止まっていて(笑)。じつは秋学期、休学することにしたんです。というのは教えるお仕事をいただくようになり、普通に両立が難しくなって、いったん体勢を立て直そう。

_____ いずれ学校を出たあと、川柳関係の仕事をしていくことはもう決めた？

暮田 そうですね。いただける仕事は全部したいですし、他に本職を持って、そっちが忙しくて川柳のことができないってなるのは嫌だという気持ちがあります。融通の利くバイトをしつつ、かなと思っています。

_____ なんとなくいいですが、10年後くらいのビジョンは想像できますか？

暮田 10年後だと35歳ですね。あんまり人生のビジョンがなくて困ってるんです。最近川柳のイベントで名古屋や神戸に行ったりだとか、この夏はいろんなところに行って楽しかった。だからあちこち川柳の仕事という名目で行きたい。

_____ それは今でも実現できている(笑)。

暮田 いや、もっと47都道府県制覇みたいな、楽しい生活を送りたいです(笑)。あちこち行って、川柳は楽しいよというのをいっぱい伝えられたらいいですね。

_____ 川柳を教えるにはノウハウが必要ですね。暮田さんの作品には、方法よりも感覚を信じているような印象を持ちます。そのあたりはどう考えているでしょうか。

暮田 それは本当に困っています。「ゆにここ」というオンラインカルチャースクールで担当している川柳講座が、今2期目なのですが。第1期の初回は、川柳ってこんなに自由で面白いんだよ！みたいな話をしたら、みんなもすごい！となっていた。それが2回目から実際に川柳を作ってみる段階で、私の川柳の作り方をできるだけ順を追って馬鹿真面目に説明したんですけど、みんな意味がわからなすぎるみたいな反応で。

_____ 直感だから。

暮田 そう。やっぱり教えるために

は技法を名づけないといけないと思うんです。俳句の「一物仕立て」と「二物衝突」とか「切れ字」みたいなものがあれば順を追って教えられるのに、川柳って技法がまだ名づけられていないんですよ。だから句をいっぱい読んで分類して、みたいなことをすればよいのだけど、まだやれていない。

_____ そこは難しいですね。暮田さんはこれからさらに下の世代の人たちに川柳を広める役割を負うことが多くなると思いますが、そのためには創作を明文化しないといけない。でもそのことでレールが敷かれて、それは果たして創作になるのかという矛盾が生まれる。

暮田 中学校で教える仕事をいただいたときに、いちおう通り一遍の説明はしたんですけど、実際に書いてみると、どうしても社会でイメージ化された川柳になってしまう。ある時期以降は本当に好きに書いてくださいという感じでいいとしても、とりあえず最初は、川柳に関する固定観念を丁寧に外していく作業が必要になると思いました。

_____ 固定観念ってありますよね。私も小学校に教えに行く機会がありますが、やっぱりもう4年生くらいで、青い空=白い雲みたいな公式ができています。それはどう壊したらいいのでしょうか。

暮田 川柳の場合は本当に、「どうダジャレにするか」というレベルの思い込みなので、「ダジャレじゃなくていいんだよ」と。自分の生活と関係ない、好きな言葉を使っていいんだよとか、そういうのを逐一やっていくしかないかもしれません。青い空=白い雲とかには、既視感のある表現をやめろ！と言って(笑)。

「川柳は何でもありの五七五」という句を渡辺隆夫という人が作っていたり、川柳はわりとなんでもありだとは言われているんです。でもやっぱりサラリーマン川柳なんかを見ていると、あっちを「おもしろ五七五」とかにして自分たちが書いている川柳の領域を守りたいみたいなこと、たまに思ったりもします。

_____ 新世代の川柳人と言われるのはどうですか？

暮田 それはもうどうしようもないというか。実際、同世代の川柳人が山ほどいるわけではないです。25歳って短歌や俳句だと別に新世代ではないですよ。でも川柳は40代や50代が若手と言われる世界なので、4～5年前は、私はあと15年くらい最若手と言われるんだろうなと思っていました。今は同世代も増えてきたので、そう思っていないんですけど。ただ、やっぱり短歌とかだと、すごく才能があるのに賞で認められなくてみたいな人をいっぱい見るので、私の場合、単純に川柳の競技人口の少なさで取り上げていただいて、それは運がよかったなと思います。実際すごくちやほやされるので、嫌な思いはしていません。

_____ いい面も、そうでない面も、期待されているゆえですね。でもなにより暮田さんが楽しい気持ちでいられる創作活動を続けてください。私もそのファンの1人です。今日はありがとうございました。



歴代奨学生一覧

所属は奨学生当時

2016年度

法律	池見祥加	早稲田大学大学院
	磯部勇太	一橋大学法科大学院
	江橋俊祐	中央大学
	小椋智子	中央大学
	尾崎友哉	一橋大学法科大学院
	北見拓也	中央大学法科大学院
	小山彰弘	日本大学大学院
	松村光泰	中央大学法科大学院
	森田新司	立教大学大学院

2017年度

法律	佐藤菜都季	早稲田大学法科大学院
	長橋佑太郎	中央大学法科大学院
	原 直哉	東京大学法科大学院
建築	岩本早代	東京藝術大学大学院
	大島 碧	東京大学大学院
	奥泉理佐子	東京藝術大学大学院
	楠元彩乃	横浜国立大学大学院
	齋藤直紀	慶應義塾大学大学院
	澤野堅太郎	工学院大学大学院
	高藤万葉	日本女子大学大学院
	常松祐介	東京大学大学院
	寺田慎平	東京大学大学院
	水越俊宇	筑波大学大学院
	山田陽平	武蔵野美術大学大学院
	山本晃大	東京工業大学環境・社会理工学院

2018年度

建築	稲永匠悟	東京工業大学環境・社会理工学院
	岩本早代	東京藝術大学大学院
	奥泉理佐子	東京藝術大学大学院
	楠元彩乃	横浜国立大学大学院
	久米雄志	横浜国立大学大学院
	齋藤直紀	慶應義塾大学大学院
	杉崎広空	筑波大学
	常松祐介	東京大学大学院
	殿前莉世	東京藝術大学大学院
	根本昌汰	東京工業大学環境・社会理工学院
	橋本吉史	東京大学大学院
	福留 愛	横浜国立大学大学院
	山田陽平	武蔵野美術大学大学院
	楊 光耀	東京大学大学院
	デザイン・工芸美術	大井直人
		筑波大学大学院

2018年度後期		
デザイン・工芸美術	赤澤雛子	東京藝術大学大学院
	石田一帆	東京藝術大学大学院
	大江 絵	東京藝術大学大学院
医学	吉田健太郎	東京慈恵会医科大学
学生起業家	西村宇貴	慶應義塾大学医学部
若手建築家	小滝健司	OAD /小滝健司建築設計
	鴻野吉宏	futuretank architects
	鈴木岳彦	鈴木岳彦建築設計事務所
若手弁護士	大江弘之	奥・片山・佐藤法律事務所
	野澤政伸	樹實法律事務所

2019年度

建築	稲永匠悟	東京工業大学環境・社会理工学院
	岩本早代	東京藝術大学大学院
	久米雄志	横浜国立大学大学院
	齋藤直紀	慶應義塾大学大学院
	杉崎広空	東京工業大学環境・社会理工学院
	鶴田 航	東京藝術大学大学院
	殿前莉世	東京藝術大学大学院
	西川幸希	東京工業大学環境・社会理工学院
	橋本吉史	東京大学大学院
	花田 昌	東京工業大学環境・社会理工学院
デザイン・工芸美術	福留 愛	横浜国立大学大学院
	楊 光耀	東京大学大学院
	両川厚輝	東京大学大学院
	今井貴絵	東京藝術大学大学院
	大小田万侑子	東京藝術大学大学院
	高本夏実	東京藝術大学大学院
	若田勇輔	東京藝術大学大学院
医学	西垣颯一郎	慶應義塾大学
口語詩句	阿部圭吾	早稲田大学文化構想学部
	石井奈津希	星野学園星野高等学校
	亀山真実	早稲田大学社会科学部
	佐々木亜希	宮城県石巻高等学校
	佐藤 廉	東北大学理学部
	林 稜	東京大学大学院総合文化研究科
	宮口紗久野	広島県立広島国泰寺高等学校
研修医	村上陽香	立命館慶祥高等学校
	森山ひかる	浦安市立浦安中学校
	吉田健太郎	沖縄県立中部病院
2019年度後期		
デザイン・工芸美術	遠藤文香	東京藝術大学大学院
	大谷陽一郎	東京藝術大学大学院
	丸山さとわ	東京造形大学
若手弁護士	大江弘之	奥・片山・佐藤法律事務所

2020年度

建築	厚見 慶	筑波大学大学院
	石田康平	東京大学大学院
	伊藤 健	東京藝術大学大学院
	小野正也	横浜国立大学大学院
	下田悠太	東京大学大学院
	杉崎広空	東京工業大学環境・社会理工学院
	鈴木遼太	明治大学大学院
	橋本吉史	東京大学大学院
	花田 昌	東京工業大学環境・社会理工学院
	藤田 悠	東京工業大学環境・社会理工学院
デザイン・工芸美術	山田寛太	東京藝術大学大学院
	大小田万侑子	東京藝術大学大学院
	高本夏実	東京藝術大学大学院
	城山みなみ	東京藝術大学大学院
	高井 碧	東京藝術大学大学院
	皆川百合	東京藝術大学大学院

医学	大野竜暉	順天堂大学
	佐野恭平	千葉大学
口語詩句	青野椰子	桜美林大学グローバル コミュニケーション学群
	阿部圭吾	早稲田大学文化構想学部
	綾部花奈	早稲田大学大学院文学研究科
	奥村俊哉	東北大学理学部
	金澤春葉	二松学舎大学文学部
	亀山真実	早稲田大学社会科学部
	郡司和斗	二松学舎大学国際政治経済学部
	鈴木浩介	国際基督教大学教養学部
	田中里奈	慶應義塾大学環境情報学部
	辻 在穂	京都大学文学部
	長谷川瑤太	宮城県古川高等学校
	林 佑	北海道教育大学教育学部
	眞鍋せいら	東京大学大学院学際情報学府
	宮口紗久野	広島県立広島国泰寺高等学校
	村井香音	同志社大学文学部
	村上陽香	立命館慶祥高等学校
2020年度後期		
デザイン・工芸美術	遠藤文香	東京藝術大学大学院
	丸山さとわ	東京造形大学

2021年度		
建築	稲坂まりな	早稲田大学大学院
	小野正也	横浜国立大学大学院
	杉崎広空	東京工業大学環境・社会理工学院
	鶴川留美	横浜国立大学大学院
	中尾直暉	早稲田大学大学院
	橋本吉史	東京大学大学院
	平田 柳	東京理科大学大学院
	古園さわ	東京大学大学院
	守本愛弓	京都工芸繊維大学
	山下耕生	早稲田大学大学院
	山田寛太	東京藝術大学大学院
	両川厚輝	東京大学大学院
デザイン・工芸美術	高本夏実	東京藝術大学大学院
	小山莉瑛子	筑波大学大学院
	高井 碧	東京藝術大学大学院
	皆川百合	東京藝術大学大学院
医学	石川菜々子	東京医科歯科大学
	中原 楊	慶應義塾大学
	松川紘之	順天堂大学
口語詩句	青木雅史	埼玉大学教養学部
	綾部花奈	早稲田大学大学院文学研究科
	伊藤万由子	名古屋工業大学工学部
	奥村俊哉	東北大学理学部
	小島涼我	早稲田大学文学部
	佐藤 陸	東京理科大学理学部
	白野実悠	新潟大学人文学部
	辻 在穂	京都大学文学部
	西本友亜	京都工芸繊維大学工芸科学部
	花澤希海	法政大学文学部
	平間悠之介	愛知県立昭和高等学校
	細村星一郎	慶應義塾大学文学部
	村上陽香	東京大学文科三類
	森山ひかる	東京藝術大学音楽学部附属 音楽高等学校
	四塚麻衣	名古屋大学大学院理学研究科
	渡邊美愛	愛知県立旭丘高等学校

2022年度		
建築	梅原千夏子	工学院大学大学院
	小川裕太郎	早稲田大学大学院

デザイン・工芸美術	勝野楓未	東京大学大学院
	北垣直輝	京都大学大学院
	櫻井悠樹	早稲田大学大学院
	杉崎広空	東京工業大学環境・社会理工学院
	曾根 巽	東京工業大学環境・社会理工学院
	鶴田 航	東京藝術大学大学院
	中村太一	東京大学大学院
	西本 光	東京藝術大学大学院
	橋本吉史	東京大学大学院
	宮西夏里武	信州大学大学院
医学	両川厚輝	東京大学大学院
	岡田江里菜	多摩美術大学大学院
	菊池虎十	東京藝術大学大学院
口語詩句	松村大地	京都工芸繊維大学
	木島優美	東京医科歯科大学
	田邊 翼	大阪大学
	田原沙絵子	筑波大学
	伊藤万由子	名古屋工業大学大学院工学研究科
	大橋弘典	北海道大学文学部
	小笠原風花	武庫川女子大学文学部
	奥村俊哉	東北大学理学部
	折田日々希	東京電機大学 システムデザイン工学部
	梶伸太郎	東京大学文学部
デザイン・工芸美術	清水将也	北海道大学法学部
	白野実悠	新潟大学人文学部
	関 朱夏	日本女子大学大学院文学研究科
	豊富瑞歩	筑波大学情報学群
	中矢 温	東京大学大学院総合文化研究科
	平間悠之介	愛知県立昭和高等学校
	松下誠一	東京電機大学工学部
	森山ひかる	東京藝術大学音楽学部附属 音楽高等学校
	吉沢美香	東北学院大学工学部
	吉富快斗	立教大学現代心理学部

2023年1月20日発行

制作・発行

公益財団法人佐々木泰樹育英会
東京都中央区明石町8番1号
聖路加タワー40階
<https://sasakitaijuikueikai.or.jp/>

編集

長島明夫(出版長島)

デザイン

刈谷悠三+角田奈央(neucitora)

印刷・製本

株式会社加藤文明社

